

研究

二〇〇五年 第三九号

史料と伊能図



伊能忠敬研究会

表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図102号の部分「伊豆下田」付近

伊豆半島は外周が第二次測量で測られ、その後、下田から伊豆七島へと渡った第九次測量の往復に、下田街道と東海岸の精測が行われた。第二次測量から十年、忠敬は体調への配慮もあつて、島への渡海をともなうこの測量行には参加を見合わせ、測量隊は永井甚左衛門を隊長に、門谷清次郎、坂部八百次、箱田良助、保木敬蔵ら、合計十一人の編成であつた。

文化十二年五月十一日付で下田から発信された、門谷、坂部、保木連名の忠敬宛報告書に、三島から韮山の江川邸を経て下田までの動静が簡易にまとめられている。

一行が下田へ向かったのは五月雨の季節、天城峠越えも雨の中だった。峠は雨、茂みもあつて伊豆七島展望の期待は外れたという。しかし、途中三回ほど星測ができ、五月八日に下田着、ここの星測では、旧測(第二次)と符合したことを喜んでいる。下田では、十一日ばかりだった渡海の風待ちの間、周辺を精測した。町内から吉佐美村にかけて測線が詳しい。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

(鈴木純子)

目次 39号 十周年大会記念号

一步を踏み出す勇気から

忠敬研究会の今後の発展を期して

未発見史料はまだある

特集 十周年記念大会

十年の歳月に多くの支援の輪

忠敬先生のタイムトラベル

夢と希望の忠敬さん

幟旗の大歓迎

総会報告・話題から

新春エッセー ハルビン生活四年目の記

三六日で世界一周(三)

研究ノート

伊能古文書教室『旌門金鏡類録』(六)

続・忠敬未公開書簡(二) 渋江新之助

伊能家文書紹介(四) 足立左内書簡

トビックス ペイレ図が日本で永久保存に

尺時計を展示

西年に因む地名小図

里帰りフロア展 全国公開終了

伊能大図九州フロア展を終えて

伊能大図フロア展新潟報告

史料紹介

伊能忠誨日記(最終回)

番外資料 忠誨宅への来訪者・訪問先

別海通信 師弟の絆のドラマに学ぶ

記念柱揮毫の依頼を受けて

続・忠敬さんはニシベツ川を渡ったのか

話題交歓

忠敬談話室だより 推歩先生と銀座の忠敬先生

お知らせ

忠敬生誕二百六十年祭予告

名譽代表 渡辺 一郎

代表理事 星 尚

毎日新聞 三

新沢 義博 五

前田 幸子 七

成家 淑子 九

山本 公之 一一

事務 局 六八

岩城 元 一二

渡辺 一郎 一八

小島 一仁 二三

伊藤 栄子 二八

安藤由紀子 三二

編集 部 二六

伊能記念館 三一

斎藤 仁 六〇

編集 部 三八

石川 精一 三九

垣見 壮一 四二

佐久間達夫 四六

佐久間達夫 五四

松浦 賢一 六一

大関美枝子 六二

吉川 新一 六二

会員 有志 六四

山本 公之 七〇

編集 部 七二

一步を踏み出す勇氣から

前代表理事・現名誉代表 渡辺 一郎

【04年12月12日 懇親会での挨拶から】

本日ここに発足10周年を記念致しまして、日本大学の伊能大図フロアの会場をお借りし、多数の御来賓と会員各位にお集まりいただき、記念集会を開けますことは喜びに堪えないところであります。日本大学文理学部はじめ御参会の皆様に厚く御礼申し上げます。特に遠方からの会員諸兄弟にはありがとうございます。

伊能忠敬研究会は、1995年11月17、19日に佐原市で開いた仏のイブ・ペイレ氏旧蔵伊能中図の里帰り展をキッカケとして発足したものであります。本年で満10周年を迎え、ペイレ中図の日本帰国が実現し、すべての最終本伊能図の所在も判明して、復元データも入手というところで、まずまずということではなかったかと考えるとところであります。

我々の活動テーマは「伊能忠敬再発見」でありまして、有名人でありながら正しく評価されてこなかった「伊能忠敬」を少しでも多くの人々に理解していただきたいということにありました。偉い偉い忠敬ということではなく、どこがすごいのか、どこが参考になるのか、ここは俺の方が勝っている、などと正確に忠敬を知っていたら、各年代層の指針となるならばと考えました。

伊能忠敬は、若者にはコッコツとした積み上げが大業を成し遂げる元であることを教え、壮年には他人がどう思うとも第一步を踏み出す

勇氣を与え、高齢者にはまだまだ頑張らなくてはという元氣を与えてくれる人物であります。来賓ならびに会友諸兄弟の御協力で、最近では抽象的な忠敬論がなくなり、リアルな忠敬に人氣が集まっているのは、誠に喜ばしいことと考えております。

振り返りますと95年に、千葉県佐原の公民館で3日間開いたペイレ中図展を機会に発足した伊能忠敬研究会ですが、96年には「伊能忠敬は江戸から測量に出発した」と江戸東京博物館に御提案申し上げ「伊能忠敬展」は11万余名と同館の開館から3番目（当時）の入場数を記録し、日本ウオーキング協会、朝日新聞社と共催した99年の「伊能ウオーク」へとつながりました。

続いて俳優座で演劇、映画が上演され、NHKは「お正月時代劇」「そのとき歴史が動いた」「ときめき歴史館」で伊能忠敬を紹介、民放も「知ってるつもり」など多数の番組で高い視聴率を稼ぎました。

伊能ウオーク終了の後は、大イベントの終了を記念して、関係者の努力および一般からの公募により、伊能隊が出立の際、必ず参詣した深川の富岡八幡宮に「忠敬が第一步を踏み出した姿」をイメージした銅像（監修 伊能 洋、制作 酒井道久氏）が建立されました。私は事務局長として企画調整の任に当たらせていただきました。

銅像建立事業の進捗中に、はからずも私は、01年アメリカで伊能大図模写本207枚を発見致しました。多難な折衝の後、国土地理院で複製用データの取得に成功されました。複製された伊能大図群の一部は、昨年11月東京国立博物館の「伊能忠敬と日本図展」で公開され、目標を遥かに超える13万余人の観客を集めました。引き続き全国で14箇所での展示会が完了し、目下、15番目の日本大学展が進行中です。国立博物館展以来の入場数は34万を超えました。いっぽう、アメリカ大図

の現物を併せ展示する「伊能忠敬と日本地図展」が神戸、仙台、熱海、名古屋の4箇所で開催され、目標11万に対し入場者数は13.3万に達しました。この実行委員会にも事務局長として深く係わらせていただきました。

この間、アメリカ大図の欠図が、歴史民俗博物館で2枚、国会図書館で1枚、海上保安庁海洋情報部で4枚発見され、214枚すべての所在が判明しました。大図のすべてを展示する展示会が、釧路、ナゴヤドームで行われ、現在、日本大学で開催中であります。

第一步を踏み出す勇氣と、たゆまぬ努力を続ける愚直さを持った忠敬さんを、益々多くの人々に知って欲しいと考えます。ついでには満10年経ちましたので、研究会の体制を一新するため、先刻、総会において新役員の選任が行われました。渡辺一郎は名誉代表となり、大友、佐久間両氏は退任、新たに元国会図書館館長の鈴木純子氏と前国土地理院長で日本地図センター専務理事の星埜氏が理事に就任し、星埜氏に代表理事をお願いすることになりました。今後とも格段の御声援をお願い申し上げます、10周年記念の挨拶とさせていただきます。



伊能忠敬研究会の今後の発展を期して

新代表理事 星埜 由尚

昨年12月12日に開催された伊能忠敬研究会総会において渡辺一郎先生の後を受けて代表理事に選出された星埜由尚です。私は、現在(財)日本地図センター専務理事の任にありますが、昨年まで約31年間国土地理院に在職しておりました。

私は、子供の頃から地理少年で地理に関することが大好きでした。

当然地図も大好きで暇さえあれば地図を描いたり、地図を漫然と眺めていたものです。長じて大学でも地理を修め、国土地理院に就職する結果となり、これまで地理・地図人生を歩いてきました。

この度図らずも伊能忠敬研究会の代表理事に推挙されましたが、私は伊能忠敬についての学識が特に深いわけでもなく、また伊能忠敬研究会員の目も浅く、永く研究会の発展に努力を重ねてこられた方々に対し失礼にあたるのではないかと、果たして八面六臂のご活躍をされた渡辺一郎先生と比較して私で務まるのだろうか、等々悩みましたが、渡辺一郎先生の御推挙と諸先輩のご理解とを得て、私もこれまで地図・測量の世界で様々な方から頂いたご恩顧に報いるべく、これからのご恩返しの一環としてお引き受けしようとした次第です。会員の皆様方のご指導、ご支援、時にはご叱責も受けながら代表としての努めに取り組んでいきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

伊能忠敬研究会は、発足以来伊能忠敬の人物及び業績についてその歴史的・社会的・科学的評価を高めることに多大な貢献をしてきました。特に、2003年に渡辺一郎先生がアメリカ伊能大図をアメリカ

議会図書館で発見され、これまでに行われた全国を股に掛けた一連の伊能大図フロア展は、39万の人々を集め、伊能図の偉大さを内外に知らせる役割を大いに果たしました。この展示に携わった方々に感謝申し上げるとともに、微力ながら展示計画の当初から携わらせていただいた私としても大変うれしく、また誇りに思う次第です。

今後は、名誉代表にご就任いただいた渡辺一郎先生のご指導も頂きながら会のさらなる発展を期して奮進したいと思っております。いくつかの課題がありますが、伊能大図全集、第二次伊能ウオークなど、実現に向かって一歩一歩努力して参りたいと思っています。会員の皆様の絶大なご支援を期待いたします。

未発見史料はまだある 05年1月21日 毎日新聞

伊能忠敬を現代に蘇らせた渡辺一郎さん 【佐藤由紀記者】

2003年秋の東京国立博物館を皮切りに16都市を巡回中の「伊能忠敬と日本地図展」は、昨年末までに計37万8452人の入場者を集め、盛況だ。200年前の古い地図の魅力とは何か。最終展示となる22日からの千葉県・幕張展の前に、忠敬を現代に蘇らせた伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表に聞いた。

渡辺さんが伊能図とであったのは30年ほど前。美しく正確な小図に感動し「伊能図を全部見よう」と決心し、こつこつと歩き始めた。51歳で電電公社（現NTT東日本）を退職、会社経営を経て65歳で引退した。引退と前後して、フランスにあった中図を借りて千葉県佐原市での展示会を開催した。これをきっかけに、96年に伊能忠敬研究会が

発足する。

「有名なものに、業績はあまり知られていない。知りたい人がこれだけいるんだから、調べてみよう、というのが出発点。志は大きく、駄目で元々という気持ちだった」

同年には江戸東京博物館に伊能展企画を持ちかけ、98年に実現した。「プロジェクトを始めるときに大切なのは、まず人集め、チーム作り、仕事の注文を取ること。そのためにはいい企画が必要」。データ通信の全国網構築に深くかかわった渡辺さんは、仕事上のノウハウを活動に応用した。このあたりは、事業に成功し55歳で引退したあとの第二の人生を測量にかけた忠敬の人生と重なりあう。

忠敬の測量の足跡をたどる伊能ウオークのほか、テレビ、芝居や映画なども作られ、伊能人気は高まっていった。

「忠敬は一歩を踏み出す勇気を教えてくれる。事業を始める勇氣も同じ。だって、あれもこれもやりたいといいながら、何も遣らない人が多いでしょう。忠敬は資金的にも技術的にも不十分だったけれど、その一歩を踏み出したんですから。中高年の間で人気がありますが、若い人には、小さなことを積み重ねれば大事業ができるということを知ってもらいたい」と忠敬の魅力を語る。

幕張展を最後に名誉代表に退くが、忠敬応援団は続けるつもりだ。将来と夢は、米国にある大図模写をなんらかの形で返還してもらおうと。「難しいとは思いますが、日本人にとつての地図がどれだけ大切かをわかってもらえば、方法もあるのでは」と希望をつなぐ。米国やロシア、また日本の地方の旧家などに関連史料がまだまだ残されている可能性が大きい。「伊能隊を泊めた村では必ず日誌などを作った。もつと史料が出てきてほしい」と期待している。

未発見史料はまだある

伊能忠敬を現代に蘇らせた

渡辺一郎さん

2003年秋の東京国立博物館を皮切りに16都市を巡回中の「伊能忠敬と日本地図展」は、昨年までに計37万8452人の入場者を集め、盛況だ。2000年前の古い地図の魅力とは何か。最終展示となる2月からの千葉県・幕張展を前に、忠敬を現代に蘇らせた伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表(75)に聞いた。【佐藤由紀】

渡辺さんが伊能図と出合ったのは30年ほど前。美しく正確な小図に感動し「伊能図を全部見よう」と決心し、こつこつと歩き始めた。51歳で電

電公社(現NTT東日本)を退職、会社経営を経て65歳で引退した。引退と前後して、フランスにあった中図を借り、千葉県佐原市での展示会を開催した。これをきっかけに、96年に伊能忠敬研究会が発足する。

「有名なものに、業績はあまり知られていない。知っていた人がこれだけいるんだから、調べてみよう、というのが出発点。志は大きく、駄目



渡辺一郎さん

量にかけた忠敬の人生と重なりあう。忠敬の測量の足跡をたどる伊能ウオークのほか、テレビ、芝居や映画なども作られ、伊能人気は高まっている。 「忠敬は、一歩を踏み出す勇氣を教えてください。事業を始める勇氣も同じ。だって、あれもこれもやりたいといながら、何もやらない人が多いでしょう。忠敬は資金的にも技術的にも不十分だったけれど、その一歩を踏み出したんですから。中高年の間で人気がありますが、若い人には、小さなことを積み重ねれば大事業ができるということを知ってもらいたい」と忠敬の魅力を語る。

幕張展を最後に名誉代表に退くが、忠敬応援団は続けるつもりだ。将来の夢は、米国

毎日新聞 2005年1月21日(部分)



記念大会から □渡辺ご夫妻に花束贈呈 □新役員紹介

□日大通りののぼり旗 □ご参集のみなさん



特報 10周年記念大会

十年の歳月に多くの支援の輪 新沢 義博

平成十六年十二月十二日雨のち曇。東京世田谷区にある日本大学文理学部で催されている展示会『伊能図の世界 あるくはかる つくる 伊能忠敬の日本図展』の会場である百周年記念館をお借りして、我が研究会十周年記念行事が行われた。

①「伊能大図フロア展」

七月十六日釧路で開催されたものと同様、東京で初の二百十四枚展示の全国展開。十月二十九日ナゴヤドームでの展示の際は、下が人工芝のため地図の上を歩けなかった経緯がある。やはり赤で記されている側線をたどりながら地名を追うことによって、あたかも数百歩で江戸時代の日本列島を一周できることがこの展示の最大の特長である。釧路の展示同様、側線に沿いながらまたしても伊能図で日本一周することができた。途中、福岡（筑後国）の田主丸にゆかりがある会員の江口さんと一緒にその地名を探したりもした。確かに現在の地図に慣れている私のような者にとっては見つけづらいが、手書きの文字で記されている自分の出生地や馴染みのある地名を発見するとちよつとした感動を地図から与えられる。つまりこういった気持ちにさせられるから伊能図は老若男女、全ての人々に認められる文化財なのだと思えて実感した。

今回の展示で目を見張るものがあつた。百周年記念館ニューアリーナ二階にある伊能大図と今現在の地形図を対比したものである。その説明文が興味深かつた。説明文を読むとどこが埋め立てられ何が変わ

つたか一目瞭然で判読できる。釧路での展示には出展されていなかったと思われるが、地理学の専攻がある日本大学ならではのきめ細かい展示内容であつた。

今回の大図展は一月二十二、二十三日の二日間、忠敬さん同郷の千葉の幕張メッセで行われる。幕張メッセと言えば現代の自然科学の展覧会等、大きなイベントが開催される会場である。文字通り下総国にある千葉市美浜区に里帰りする今回最後のフロア展となる。千葉市在住の学生時代の先輩（地理学専攻）と見学に行くことを今から楽しみにしている。

②総会 百周年記念館二階の会議室

第一号議案は渡辺代表理事による経過報告。昨年（二〇〇三年）の東京国立博物館で行われた「伊能忠敬と日本図」展から現在行われている日本大学でのフロア展までの経緯が報告される。

第二号議案は会則の変更。

第三号議案は役員の改選。幕張メッセでのフロア展後、渡辺代表理事は名誉代表に、新代表理事に星埜さんが就任。現役員と新役員の紹介がある。会員の拍手により滞りなく議決される。

就任の挨拶の中で星埜代表理事は地理少年だったと述べられた。

「小学生時代から集めた地形図が数百枚、結婚祝いの地図ケースに収めてある」（二〇〇三年十月三十一日朝日新聞「ひと」欄に掲載）

③記念公開講演 国際会議場 前半は日本大学主催の講演 一、「伊能図下図と伊能図作成過程」

紺野弘幸氏（伊能忠敬記念館学芸員）

紺野氏は「側線が赤ではなく黒い線のもの、下図ではないと判別

できる」ということを、提示した史料から立証した。

以前私の卒業論文で伊能忠敬を主題にした際、佐原を数度訪れ紺野氏や青木司学芸員に資料の借用でたいへんお世話になった。両氏とお知り合いになってこちらも早や十年となる。

二、「東京国立博物館の伊能図をめぐる」

佐々木利和氏（文化庁主任文化財調査官）

前東博研究室長であった同氏は博物館の内情をわかりやすく話して頂く。東博で伊能小図が発見された過程や、図書館と違って博物館では史料を廃棄しないので現存する史料が多い。はたまた史料の扱いが不慣れな大学教授がいらっしゃることなど具体的な事例をあげた。

同氏の長い経験から「史料は求めていても見つからない。時機が来たら向こう（史料）からやって来る。しいて言えば待てば海路の日和ありといった感じか」といった発言が印象深く脳裏に刻まれた。さらに「忠敬先生の熱意が後世にまで引き継がれた今、その顕彰が現実となつて実践されている」とも話された。

後半は国際地図学会・伊能忠敬研究会共催の講演

三、「新発見の伊能測量隊員日記」

安永純子氏（愛媛歴史文化博物館学芸員）

隊員は第六次測量に従事した柴山傳左衛門。同氏は特徴として、測量隊員唯一の日記、名所旧跡などを詳細に記録、下級武士の心情が豊かに描写されていることをあげている。

拝聴しておもしろかったのは藩主からの贈物を換金していたこと、端午や七夕の節句での不思議な文章に残したことから当時の人の持つ無常観が伺えるという点である。また地元に残る伊能図の写し「秘図」として取り扱う様にと記されている地図があるという。

同氏は伊能測量隊の影響は地方の測量技術向上につながったことと同時に、地方と地方の結びつきを強める働きも果たしたと語った。

質問の際に会員の西川先生が香川の久米栄左衛門と忠敬のつながりの発表も今後期待したいと発言された。また司会役の鈴木純子さんからは、今後は伊能忠敬をとりまく人物など地方に埋まっている史料を調査研究して発信することが望ましいと提案された。

ちなみに私は同氏が勤務されている博物館を「伊能ウオーク」の時に見学した記憶がある。同館は小高い山の上にある。

四、「伊能忠敬研究会十年間の歩み」 渡辺一郎氏

前身である「伊能図探求」の発足から江戸博での展示、伊能ウオーク、俳優座の舞台劇、映画、富岡八幡宮の銅像建立、仏・伊・米国で発見された伊能図の経緯、東博での展示からフロア展に至る現在までの流れを説明される。今後の十年間として伊能大図全集、伊能忠敬全集の刊行。四十七都道府県を各一話主題にした大河ドラマの構想とその実現に向けての抱負を語られた。

④懇親会

学内食堂において十七時半より十九時半まで約百名の方が集い、懇親会を深める。渡辺代表理事が式辞を述べ新役員紹介の後、星埜新役員が代表挨拶をし、島方日大学部長、渡邊国土地理院長、岩瀬佐原市長から祝辞をいただき、野々村日本地図センター理事長からの乾杯の音頭で会が和やかに始まる。

途中、お世話になった方や団体から一言ずついただく。会員からは遠方からお越しの方に近況報告していただく。新潟県三条市にお住まいで集中豪雨、震災に遭われた山浦さんにも壇上に上がっていただく。終了間際、役員の粋な演出で渡辺夫妻に花束贈呈式が執り行われる。

プレゼンターは若輩者の小生。渡辺貞子さんに感謝の意を込め贈呈する。お酒の酔いも手伝って会場が大いに沸いた。

締めはおなじみ注連縄^{しめなわ}研究の太友さんが三三七拍子で盛大な会を中締めする。

冷たい師走の雨が降る日であったが、日大文理学部のご協力とご賛同の下、伊能忠敬を囲んでスタートした研究会は、十年の歳月の中でより多くの方が支援する大きくて優しい輪に包まれているのだと家路につきながら実感した。

忠敬先生のタイムトラベル 前田 幸子

日本各地で大きなブームを巻き起こしている伊能大図が、また新たな驚きと感動とともに壮大に広げられた。日本大学文理学部主催「伊能図の世界展」は12月6日から23日までの18日間にわたり世田谷にある日本大学文理学部を会場として開催された。内容は計五回12人の講演者による各種講演会、二回の映画会、週二回のギャラリートーク等々と大変盛りだくさんなものであった。またこの展覧会と同時に開催で12月12日(日)に伊能忠敬研究会・日本国際地図学会記念講演会が開催された。

当日桜上水の駅を下りると駅前商店街の道の両側に「伊能図の世界展」という黄色い幟がずらりと並んで私たちを出迎えた。この旗のおかげで私たち参加者は道に迷うことなく会場へたどりつくことができただが、しかし意表をつくこの黄色い幟は単に道しるべというだけではなく、より深い意味がありそうだと私は睨んだ。つまり主催者である日大文理学部の島方洗一日大文理学部長の挨拶文の「今回の『伊能図展』は日本大学文理学部が地域の文化・学術の拠点として、本格

的かつ大規模に世に問う学術行事の第一回となるものです」という言葉からは、日大もまた「象牙の塔」から「地域社会に開かれた存在」に脱皮する必要に迫られていることが伺える。その日大が地域文化・学術の拠点として世に問う学術行事の第一歩として企画したのが伊能図展である。これは忠敬が「学術性」とともに一般の人々の共感を呼び起こす「人間力」をも兼ね備えている点に着目したからではないだろうか。「伊能図の世界展」と書かれた黄色い幟は地域社会と学術世界をつなぐジョイントとしての役割を果たしつつ風にはためいているように見えた。

会場の日大文理学部百周年記念館に入ると伊能大図が視界に収まりきれないほどのスケールで広げられていた。巨大な地図と対比するとその上を歩く人が小人のようである。でもなんだか釧路の時より地図がちよつと小さく見える。私「この地図は釧路のときと同じですか。ちよつと小さいような感じがしますが」渡辺理事「同じだよ。小さく感じるのは会場が大きいせいだろう」さすがに今回も北海道が本来の位置には収まらず佐渡の向こうの日本海にあるが、しかし会場の広いこと。地図の周囲にはかなりゆとりがあり、そのぐるりに各種の伊能図や測量機器、測量方法の説明パネルなどが置かれている。さらに階上ギャラリーにも各種の地図が多数並べられ、「大谷亮吉先生以来の本格的かつ総合的な学術展示」(島方文理学部長)というに恥じない質と量である。興味深いのは同じ場所について伊能図と現代の地図を同縮尺で並べて対比させてある展示である。伊能図が国土地理院の地図と比べても遜色ないほど正確に作られていることが一目瞭然で分かるし、また一方では二百年前と現在では地形が変化したところがあることも比較できる。現代の地図は国土地理院の地図の拡大コピーを張り合わ

せた労作である。この展示を準備するのにどれほどの作業量と時間がかかったのだろう。地図の脇に立っている説明役の大学院生に聞いてみた。「地理学科でこれらの地図をつくるのに一週間くらいかかりました。その間自分の研究はそっちのけでした。(笑)」やはり大変だったらしい。苦勞の甲斐あって非常に充実した展示が実現した。

会場では多くの参観者が地図の上や壁際の展示の前を行ったり来たりし、また立ち止まったりしている。そこにひととき目立つ若い二人連れがいた。モデルのようなすなりとした長身を流行の服でつんだ華やかなお嬢さんと、同じく今風の服装をしたスマートな若者である。伊能展にはまったく珍しいタイプの参観者であり、しかも長い時間かけて熱心かつ丁寧に見て回っている。「日大の学生さんですか?」と話しかけてみた。すると「私たちは宇都宮から来ました。今日は別の用事で上京したのですが、歴史好きの母にこの展覧会を是非見るように勧められていたので、今日ここに立ち寄りました」とお洒落な外見からは想像もつかないほど堅実で知性あふれる答えが返ってきた。意外さに驚きつつ伊能図の印象をたずねた。「まず大きい、そして美しい。伊能図には歴史も入っているのでとても面白く感じます。詳しく見るほど興味深い。地図に描かれているお城の形などにも注目して見えます」おお現代の若者の中にも伊能図にこんなに興味をもってくれている人がいるのかと、非常に嬉しくそして心強く感じたのであった。

伊能図を見る人はそれぞれの思いをこめて見ているということも面白く感じたことである。年配のご夫婦が鹿島灘のあたりにしやがみ込んでなにやら話している。ご主人が声高に言い放った。「小関村にマル印をつけるべきだよ!」どうやら忠敬先生の出身地である小関村を伊能図の聖地としてマークせよという主張らしい。おそらく小関村あるいはその近隣から来た方であろう。また、別の紳士は「地元から来ま

した」と言うので世田谷の人かと思つたら「朝早く佐原を發つて来た」と言う。なるほど地元とは忠敬先生の地元ということであった。どちらの方も「おらが村の忠敬さん」に対する親近感と誇りが感じられてほほえましく思つた。

一方、日大の地元である桜上水から来た父親、母親、五年生、二年生の典型的な親子連れは近所でこのような大きな催しをやっているというので見に来たとのこと。楽しそうに見学したあと、会場の片隅に立っている忠敬先生の人形看板と並んで記念のツーショット写真を撮るカメラ付携帯で撮っていた。学術展とはいいいながら、堅苦しいばかりではなく展覧会を楽しんで見られる工夫がしてあるのも今回の特徴であった。

この展覧会は説明員が要所要所に配置されていたことも特徴的であった。たとえばフロア展では小学生の一人が床にしやがみ込んで地名を捜しているその中心にいて左手に地図帳を持ち右手で大図を指して説明をしている大忙しの若い男性。どんなことを説明していますか? 「ええ、例えば、このあたり。山の手線の神田―品川間は江戸時代には海だったんですよ。現在の地図と伊能図を見比べて、違いを実感してもらっています」ちなみにこの方は「多摩自然科学研究会」のメンバーで昨夏に別海町の西別川河口を訪れ釧路市長主催の歓迎会にも出席していたとのこと。そういえば多摩から来たという若者のグループが出席していました。元来地図とは関係なかったが、釧路の伊能展がきっかけとなって今回説明員として参加しているとのこと。こんな縁で「忠敬の輪」が広がっていることを喜ばしく思つた。

もう一人、会場の周囲に展示されたパネルの説明にあたっているひげの大学院生は、「地図の準備作業での僕の担当はビニール貼りだけで

した(笑)。伊能図はもっぱら定量的である現代の地図とは違い、定性的な要素を持っているところが面白いと思います。たとえば伊能図には富士山をはじめ特徴的な山の形などが書き込んでありますね。そういう定性的な要素も持っているところが現代の地図にはない伊能図の面白さだと思うんです。なるほど。伊能図に書き込んである絵は単なる飾りではなく重要な地形の情報であるということに今さらではあるが気づかされた。

二階の展示室のハイライトは美しくよみがえったペイレ氏旧蔵の伊能中図であった。このたびフランスから永久里帰りを果たして展示されていた。地図の修復にあたった京都写真印刷(株)の方が地図の説明をして下さり、それによると「この地図は3億9千6百万画素で撮影しました。用紙は竹紙、コウゾ、コウゾ、の三層構造です。この伊能図のために立命館大学の研究室と共同研究で技術開発しました」ということであつた。「3億9千6百万画素」に仰天したあと、国際会議場で開催された国際地図学会・伊能忠敬研究会共催の記念講演会を聴いた。講師は愛媛歴史文化博覧会委員安永純子氏の「新発見の伊能測量隊員日記」と渡辺代表理事の「伊能忠敬研究会10年の歩み」であつた。この講演のなかで安永氏は「忠敬先生は大きな空間と二つの人生という壮大な時空にはばたいた人」であると形容した。まさにその通りである。しかし私がこの「伊能図の世界展」を通して感じたことは、忠敬先生は彼自身の74年間の時空だけを生きただけではなく、平成の現在にもまだに生き続けているし、そしてこれからの若い世代の時空にも大きく翼をひろげてはばたいていくであろうということである。会場で配られた新聞「フジサンケイビジネスアイ」には伊能図展「二百年前の日本へタイムトラベル」という見出しが付いていたが、過去・現在・未

来という時間を超えてタイムトラベルしているのは私たちではなくむしろ忠敬先生のほうなのはないか、と思った。忠敬先生は二百年前から全国を歩きまわり、今でもみんなを勇気づけ歩き続けている。そしてこれからも多くの人々の希望の光としてみんなの先頭に立って歩いて行くであろう。そんなことを確信させる10周年大会であつた。忠敬先生の永遠不滅のパワーを感じて帰途についた。

夢と希望の忠敬さん 成家 淑子

一九九九年一月二十五日東京からスタートした伊能ウォークが、二〇〇〇年一月一日無事二年間の旅を終えて東京にゴールした。延べ一万一〇三〇*六百日に及ぶ一大ウォークである。そして一月二日には、伊能忠敬記念館から佐原市役所まで約二*のラストウォークがあり市民もその中大勢参加した。

二百年の時間を越えて忠敬の全体像は蘇っている。伊能ウォーク隊とみんなで元気に迎えた廿一世紀の幕開けを思い出しながら、新年佐原でウォークをする人達が多くみられる。伊能忠敬研究会十年の歩みは、全国の人達に夢と希望のパワーを生み出していると思う。

創立十周年記念集会在日本大学文理学部で盛大に行われた。

①伊能家所蔵の古文書、遺品

・蝦夷地測量辞令
・測量下図類
・測量司借用証
・シーボルト事件封廻状
・伊能勘解由病死御届 等66点
未公表の伊能家文書、遺品の展示である。これは伊能陽子さんの祖母こうさん、母多嘉子さん、そして陽子さんの三代の女性たちで守ってきた「忠敬先生」の遺書・遺品であり、国の重要文化財として記念

館に寄贈して伊能家に残ったものである。

一八七二年十一月付け「伊能図借用証」一八七四年八月「実測図献納二付賞金下賜」をみると、明治年間以降の作製図はこの伊能図が源流ということになると思われる。

日大文理学部長島方洗一氏は、残った古文書類の中には、学術的に見て今までの忠敬研究の定説の修正を加えるかも知れない貴重なものであるとのべている。又、文理学部研究スタッフを中心として地域文化・学術の拠点として大学の学術行事にもつながることができたことを伊能家に感謝していた。

②日本学士院所蔵 大谷コレクションには地図を除く文書類

・山嶋方位記 全六十七巻 ・測量日記 全十六巻 等 86点

大谷亮吉編著の『伊能忠敬』（一九一七）では、旧制佐原中（現佐原高）の学報八号・機関紙『伊能忠敬』の芳名録を思い出す。

一九〇九年帝国学士院の事業として『伊能忠敬』の研究を理学博士長岡半太郎が提案し弟子の大谷亮吉が選ばれた。大谷亮吉は辞令をうけ、伊能忠敬旧宅を訪れ忠敬の遺稿・遺品などの調査にあたった。大谷亮吉の佐原での調査を行ったとき、旧制佐原中の海塩錦衛校長が部下職員とともに協力し、一九一一年大谷・海塩監修で旧制佐原中教諭加瀬宗太郎記述の『偉人伊能忠敬』が出版された。

物理学者の長岡半太郎・大谷亮吉が伊能忠敬旧宅を訪れた時、忠敬の遺稿・遺品を懇切丁寧に説明する仕事を続けたのは、忠敬から五代目にあたるこうさんである。いろいろ縁を感じ、こうさんのお仕事にも感謝している。

③伊能家所蔵の暦学と星図

・恒星全図

・赤道北恒星図、赤道南恒星図

・仏語曆象編斥妄草稿下書

・甲戌七月廿五日夜星測

・己亥十一月望月触実測

忠敬は地図・測量で名前が知られているが、家業の傍ら、天文・暦学を学び、科学者でもある。忠敬が江戸へ出ていった時は高橋至時の門人になった。至時から門人に教えるのにはまず中国暦法を学ばせ、その後にはじめて西洋の暦法を学ばせるのに、忠敬には『曆象考成・上下篇』から教えたということである。その時の忠敬の学問に対する情熱は、老人と思えぬほどのエネルギーであったといわれている。これは、至時や重富によって導かれた新しい学問、西洋の暦法そのもののすばらしさであった。これが忠敬の心身に若者のような活力をみながらさせているということを佐原古文書学集会で小島一仁先生から、伺ったことが思い出された。

忠敬の全国測量、初の科学的日本地図制作を完遂。家業の傍ら学問。齢五〇才からの第二の人生——知れば知るほど夢や希望、パワーを与えてくれる。

④海上保安庁海洋情報部蔵

・大図四枚 ・寰瀛（かんえい）水路誌

⑤国立歴史民俗博物館所蔵

・下図別表大図 二面（江差・ラコシリ島）

「初めの一步が十年の雄大な広い路に」研究会の基礎づくり。多くの人の輪。研究は広く無限。共に歩もう。十年間の活動のあゆみは偉大である。渡辺一郎名誉代表ご夫妻には感謝の気持ちをこめて花束を贈呈した。研究会発足当時の課題が十年で集大成され、日大文理学部で展

開された。多勢の人が集まり、その成果をながめ、伊能忠敬の人間像にせまることができた。

のぼりばた

幟旗の大歓迎

山本 公之

今回の記念大会の会場のある京王線下高井戸駅の階段を降りてまづ目に入ったのは「伊能図の世界」の幟旗の歓迎―熱烈歓迎とは恐らくこの事だろう。

今年電通カレンダーは、海外財宝・日本の絵画、屏風絵集成である。

幕末には徳川將軍からオランダ國王やイギリス女王、フランス女王、ナポレオン三世やアメリカ大統領らに、日本の文化を代表する贈り物として屏風絵が活用されていた。海外に旅して、美術館や博物館の陳列室に美しく華やかな日本の屏風画作品を見つけて、誇らしく、嬉しく思われた経験があるかと思います。

アメリカにあった伊能大図とフランスにあった伊能中図が併催され、多くの人に歓迎され華麗に変身したのが嬉しい。

二十万分の一の地球の上に立ち日本列島悉く歩みぬ

(つくば国土地理院中庭の地球の模型)

この五・七・五・七・七は、会員武田威氏の亡き奥様の歌集『淡きくれなゐ』に収められている。もしも、アメリカ帰りの伊能大図の上を歩かれたら、きっと新しく詠まれたことであろう。

忠敬を研むる会に關はりて今朝も出て行く夫傘寿越え

(伊能忠敬研究会)

内外の境界または出入り禁止のしるしに引きわたす繩
特に神前または神事の場にひいて清浄な地を区画するに用う
新年に門戸に張つて禍神が内に入らぬようにとの意味を示す

地域を限るための「目じるしの繩」を注連繩とすれば、今では死語同然「神州」と言われたこの日本列島を、徳川幕府が鎖国という方法・手段により諸外国と対応した時代に、天と地・陸と海との際を合理的な判断に基づいて注連繩をはりめぐらしたと愚かな妄想にふけたが如何。記念パーティーの手締めは、注連繩に造詣を深めるべく生まれてきた大友顧問の音頭宜しく納まった。

第六次測量隊員芝山傳左衛門旅中日記を研究発表下さった愛媛から安永純子さんをはじめとして、全国各地から集まられた会員並びにご来賓の皆様からの一言を、敬意を持って話題をお聞きしたかった。和やかな暮れ近き短夜の灯りの下でパーティーは続く。

江戸・高井戸間が四里余りあり人馬難儀に及ぶというので甲州道中と青梅街道の追分に甲州街道第一の宿、内藤新宿が出来たということ。その前はここ高井戸が江戸から最初の宿場だった。伊能忠敬の足跡は文化八年(一八一二)五月七日小仏・八王子・府中番場・そして、この下高井戸宿の玉屋吉右衛門、角屋伊左衛門・又右衛門方に宿泊している。次の日は内藤新宿そして深川黒江町帰宅と相成る次第です。
第七次(九州一回目)測量の帰りであった。

前日十一日、日本ウオーキング協会主催の「伊能図展ウオーク」は
大山街道、甲州街道二手に分かれて忠敬の道を歩いた。

ハルビン生活四年目の記

岩城 元

授業の相手は大学院生だけに

新聞社を定年退職後、ハルビン理工大なるところで日本語を教えるようになって四年目に入った。最初から「何年」と決めていたわけではなく、大学側の「もう少しいたらどうですか」の声に誘われて一年ずつ延ばしてきた。しかし、四年目はさすがにやめようと思った。三年がひとつの区切りだと思ったからだ。が、大学側からまた「あと一年くらいどうですか」と言われて気持ちがぐらついた。ちなみに、こちらの学期は九月に始まり、七月に終わる。

この大学に來た時、日本語科の四年生は二クラス、三十五人ほど、大人数の一年生でも四クラス、百人ほどだったが、毎年学生数が増え、今の一年生は九クラス、二百人ほどいる。学生がこれだけ集まってくるのは、一つには、日本語を勉強しておけば就職に有利だからだ。一方、日本人教師は三人、四人、五人と増えてきたが、学生数の増加にはとても追いつかない。いくらでも欲しいのだろう。

しばらく考えた。それまで当大学の外国語学院（「学院」は日本の大学の「学部」に当たる）の日本語科三、四年生を相手に日本語の「精読」「作文」や「日本経済」「日本文化」、大学院生を相手に「日中比較文化論」といった課目を週に十四時間ほど担当してきた。これと同じ

ことを四年目も続けるのでは、いささか芸がない。

そうは言っても「作文」にはもう少し力を入れてみたい。中国語でも同じだろうが、文章を書くのは大変に難しい。三年生、四年生になると、日本語の会話はかなり上手で、意思疎通にそれほどの不自由はない。が、文章となると、ガクリと落ちる。日本語科の教授クラスでもメールをもらったりすると、日本語として変な表現があちこちにでてくる。名文でなくとも普通の日本語を書けるように育ててみたい。それには、とりあえずは日本語科の大学院生がいい。将来、大学の教師を目指している大学院生相手に徹底的にやってみたい。できれば、日本で日本語の文章で食べていけるくらいにしてみたい。学部の三、四年生では相手としてまだ力不足だ。

そんなわけで、大学側には「四年目は大学院生を相手に『作文』だけをやります。それでもいいなら、あと一年」と申し出た。作文の授業は普通週一回だから、週の授業時間も二時間に減ってしまう。給料をもらわないボランティアの教師だから勝手なこととも言えるのだが、これでは大学側も困るだろうと思ったら、意外にも「どうぞ、どうぞ。それで結構です。お願いします」と二つ返事が返ってきた。

風呂以外はすべて完備の宿舎

そうかと言って、たった週二時間の授業で大学提供の宿舎に居座るのは厚かましすぎる。一人暮らしなのに、宿舎は居間、書斎、寝室と三部屋もある。十人やそこらの客が来ても大丈夫だ。広い台所もある。光熱費、水道代の類は大学側の負担だし、電話代、タクシー代まで限度はあるが大学が払ってくれる。宿舎にはテレビ、冷蔵庫、洗濯機から机、テーブル、ベッド、ソファ、タンス、本棚、鏡台、電子レンジ

など家具・調度品の類が備え付けてある。テレビはNHKやBBCも見られるし、パソコンも提供されている。難点を言えば、風呂がない。シャワーだけが、これにもすっかり慣れた。この地ではシャワーさえないアパートも多い。贅沢は言えない。中国へ長期の旅行に来て、三部屋の豪華ホテルにただ泊めてもらっているようなものだ。週二時間の授業をするだけで、こんな宿舎にいては申し訳ない。

そこで、殊勝にも「住む所くらいは自分で探します。宿舎を出ます」と大学側に申し出た。すると「いや、そのままいてください。日本からボランティアで来てもらっている方に宿舎も提供しないというのは、我々の面子が潰れます」と言う。過去三年間の実績(?)を評価して、無理を聞き優遇してくれたようだ。

ラクチンな四年目

ということで、最初の三年と比べると随分と楽な四年目が始まった。「作文」を教えている大学院生は修士課程の一年生、二年生を合わせて女性ばかりの十七人。週一回、二時間の授業でこなせないことはないが、作文の授業の場合は十七人が一クラスではやや多すぎる。そこで、根はまじめな僕のことゆえ十七人を三つに分け、週に六時間の授業をしている。「男」「女」「酒」「離婚」といったテーマで作文を書かせ、全員で全員の作文を添削しあう、という方法で授業を進めてきた。

ちなみに十七人は、学部の日語科を卒業してすぐ大学院に進んだ者、いったんはどこかの大学で日本語教師をした後、母校の大学院に戻ってきた者といったふうに、経歴はさまざまだ。結婚して子持ちの人もいるし、ばついちもいる。男は理科系に進む者が多いので、大学

で日本語を勉強する学生はわが大学の場合、女が六割七割を占めるし、大学院になると、さらに女性に純化していくようだ。

ハルビンっ子の酒の飲み方

僕の指導よろしき(?)を得て、彼女たちの日本語の文章力がどの程度になったか。この原稿の行数稼ぎの下心もあって、一つだけ原文のまま紹介したい。「酒」をテーマに書かせた文章だ。

私は女性なので、お酒にあまり興味を持っていない。でも、あえて言うならば、ハルビンの人はとてもお酒が好きだということだ。

小さい時にすでに、そう思っていた。父の同僚は私の家へよく遊びに来て、来る度に必ず父とお酒を飲んでいった。そして、彼らはお互いにお酒を勧めあい、最後には、酔っ払ってしまった。食べたものをみな吐き出すこともあった。見たところによると彼らは体の具合が悪そうだった。その場面を見て、たぶん、彼らが二度とお酒を飲みたがらないと思った。しかし、結局、私の考え方は間違っていた。やはり、飲み続けている。

ハルビンでは、友達とか、同僚と一緒に食事したら、必ずお酒を飲まなければいけない。若者であろうと、中年であろうと、それは変わらない。そして、お酒を勧めることは、たぶんハルビンの特色と言えるだろう。食事中、いつも「乾杯!乾杯!」や「一杯、差し上げましょう」と言う場合がしばしばある。それに、ハルビンの人が言う「乾杯」は、日本語の「乾杯」とは違う。ハルビンの「乾杯」はお酒をからにするという意味だ。もしちよっと一口だけ飲め

ば失礼になってしまう。お酒に弱い人にとつて、それは一番いやなことだ。でも、飲むよりしかたがない。もし、飲まなかったら、ご馳走してくださった人は喜ばない恐れがある。彼らの目からは、お客さんが飲まなければ、十分にもてなしができないことを意味する。実はその考え方が間違っている。私にとつては、のんびりとジュースやビールなどを飲みながら、友達と話したりすることは一番楽しいことだ。

以前、アルバイトをしていた時に、よく日本の会社に電話をかけた。「出身地はどこですか」と聞かれる場合もあった。「ハルビンの出身です」と答えたら、ハルビンを知っている人もいるし、知っていない人もいた。でも、知っている人のなかの半分近くは「知ってる、知ってる、お酒に強いところだ」と言っていた。たぶん、彼らはハルビンに来たことがあるのだと思う。その時、日本のお客さんは「もし、乾杯と言われたら、どのように断つたらいいかということをお教えしてもらえますか」と質問した。こう考えてみると、ハルビンのお酒の飲み方は、相手に迷惑をかけることになっている。

私はハルビン以外のお酒の習慣はあまりわからないが、独特な地方風俗を持つことはいくことはあるが、度がすぎれば、逆に他人にいやな感じを与えてしまう。だから、ハルビンの人は、改めて自分のお酒の習慣をよく考え直すほうがいいと思う。

——以上、冒頭に書いたように原文のまま。最後の段落に「あまりわからないが、いいことではあるが」と「が」の続く文が出てきたり、助詞の使い方が一部でややおかしかったりするが、「あい

うえお」から日本語を習い始めて6年目、日本留学の経験もない外国人が書いた日本語としてはまずまずではないだろうか。起承転結もしっかりしている。

「クコ酒」に魅せられて

実はハルビン滞在が四年目に入ったのは、だらしない話だけど、酒のせいもないことはない。写真をご覧いただきたい。



わが家の「クコ酒製造装置」

お粗末ながら、これがわが家の「酒庫」である。中央の大きな瓶の中に見えるのは鹿の角と朝鮮人参だ。朝鮮人参はありふれたやつだが、鹿の角は二年ほど前、わが黒龍江省の北端、ロシアとの国境に近い所から冷凍車を取り寄せた。野性の鹿のもので、日本円で三万円ほどかった。これを「白酒」つまり高粱と米から作った、言わば中国の焼酎の中に漬けてある。僕の愛飲している白酒の酒精度は三八%と、ちよつと聞くと強いようだが、白酒の中では一番弱い。四八%、五二%、あるいは六〇%と、上には上がある。

で、鹿の角を漬けた白酒が何に効くかと言うと、腎臓にいいそうだが、つまり、健康にいい。真偽のほどは不明だが、中国では昔からそう言われている。全くのうそでもないだろう。男性の精力剤になるとも言われているが、そつちのほうには関心がない。

次いで、その両脇の瓶だが、ここではクコ（枸杞）が白酒の中に漬けてある。この白酒のうち五分の一ほどが真ん中の瓶から移したものだ。真ん中の鹿の角を漬けた白酒は、ストレートで飲むと効果が強烈過ぎると言うので、このようにブレンドしている。強烈云々が本当かどうか、これも真偽のほどは不明である。

白酒はスーパーなんかで売っているのは買わず、好みのやつをやはりロシア国境に近い某地の工場から十箱、八十本ずつ取り寄せている。二年ほど前、親しくなった中国人に教えられ気に入った銘柄だ。工場出し価格は四五〇ミリリットルの瓶が一本十三元、日本円にして百六十円ほどだ。白酒として特に高くはないが、安くもない値段である。写真のそれぞれの瓶にはこの白酒が六く七分ずつ入っている。

くどくどと書いてきたが、以上のような講釈はどうでもいい。要はこのクコ酒がうまいのである。日本でもクコ酒は作れるが、日本の焼酎で作ったクコ酒と、白酒で作ったクコ酒ではまた味が違う。白酒そのものは独特の臭みのある酒で、中国の風土や料理には合っているが、日本に持ち帰って飲むと、ただ臭いだけといった感じの酒である。以前、日本のわが家でひとり白酒を飲んでいたら、妻から「臭くて我慢できないから、庭に出て飲んでください」と言われたほどだ。

が、クコ酒にすると、味が実にマイルドになる。中国の料理にさらにピッタリ合う。普通の白酒が飲めなくなるほどだ。そこで、このクコ酒をペットボトルに入れて持ち歩き、レストランでもこれを飲んでいる。ハルビンも最近、世知辛くなり、たいいていのレストランでは「酒類の持ち込みお断り」だが、このペットボトルの白酒に文句を言われたことはまだない。店側も中身が何なのか、判断しかねているのかもしれない。もし、文句を言われたら「これは日本の薬酒である。私は病人で、これがないと死んでしまう」とかなんとか言おうと思っているが、これまでその必要は一度もなかった。

わが家の「クコ酒製造装置」は一年前まで、写真の中央と向かって右の二本だった。ところが、この酒のうまさや周りに分かつてくるにつれ、これまではビールしか飲まなかった連中が食事の際「あれはありますか」と、クコ酒を僕に所望するようになってきた。「生まれてから今まで白酒を飲んだことはありませんでしたが、先生のクコ酒を飲んでから、白酒が目覚めました」と言う日本語の女の子がいる。それやこれやで「供給」が「需要」に追いつかなくなり、写真の向かって左の製造装置を増強した。

白酒にクコをたっぷり入れ、一応マイルドな感じで飲めるようになるまでに五日間くらいがかかる。本当はもう少し長く漬けておいたほうがいいのだろうが、需要が旺盛すぎて、そうもいかない。五人から十人で食事すると、四五十ミリリットル瓶の二、三本分が消えてしまう。食事の際のこのクコ酒提供も、もちろん無料、言わばボランティア活動である。

中国の「酒文化」に貢献

世界で一番古い酒造りの歴史を持つといわれる中国で、白酒はおそらく酒造りの当初から存在したものだろう。だが、最近は飲む人が減っているようだ。その中でのがクコ酒の健闘——中国の酒文化にくらかの貢献をしているのかもしれない。そして、日本に帰ってしまふとこれが飲めなくなる。そう思うと、中国を去る気持ちにはなかなかなれないのである。

白酒のことばかり書いたが、ハルビンにはビールもまたいい。中国のビールと言えば、日本では「青島ビール」が有名だが、「ハルビンビール」は青島ビールより二年早く生まれた中国最古のビールだ。当地にはほかに「新三星ビール」というのもあり、どちらもさっぱりしていてうまい。そして、何よりも値が安い。日本の酒屋に似た「食雑店」で買えば、一番安い大瓶が一本一・五元、日本円にして二十円足らずだ。もつと値の高いものもあるが、これで十分だ。レストランで飲んでも、一本が二・五元か三元。心置きなく飲める。

『地球の歩き方』によると、ハルビン市民のビールの消費量はミュンヘン、モスクワについて世界第三位とのこと。建築工事や道路工事

をやっている人たちが道端で昼食をとっている。そばにはビール瓶が並んでいる。世界第三位もうなずける。

要するに「酒環境」「アルコール環境」とでも呼ぶべきものが、当地ではまことにいいのである。時には学生などが「酒がお好きなようですから」と、白酒を下げて来てくれることもある。その際、一本ということは絶対がない。必ず二本である。一本だとケチで失礼にあたるからで、こんな点でも酒環境はすばらしい。

先日、宿舎管理の女性と話していたら「大学の資料では、岩城先生は2008年まで当大学にいらつしやることになっています」と言う。そんなことを言った覚えはないが、「当大学」は別として、案外そういうことになってしまうのかもしれない。

編集部注

岩城さんは「アスバラ・アサヒ・コム」でインターネットキャスターとして「ハルビン発なんのこつちや」を書かれています。経済成長の著しい今の中国やハルビンの身近な出来事を鋭く観察する。

隔週木曜日に更新されています。そこではこんなふうに筆者紹介がされていました。

【イワキ ハジム むかし新聞記者、いまは中国ハルビンの大学で「教師」4年目。教師をボランティアでやる代わり、授業料免除の「留学生」の資格も与えられているのだが、授業についていけず休学中】

2008年は北京オリンピックですね。



今年の冬は家族が次々にやってきてアテンドに追われた。
まず一月八日、ハルビンの氷祭りの会場で妻、次男夫婦と。



次いで一月十九日、鴨緑江をはさんで北朝鮮と向かい合う丹東で長男と。
後ろの川は鴨緑江の支流で、対岸は北朝鮮。

二六日で世界一周―世界を歩こう 第三話

渡辺 一郎

リマ 七月四日午前中、ホテル隣のイタリア美術館。国立美術館。午後ガイドの案内でダウンタウンへ。

大聖堂（カテドラル）、市庁舎、大統領府がまとまって、街の中心を形成する。大聖堂は南米の征服者フランシスコ・ピサロが礎石を自らの手で置いた南米最古のカテドラルで、一五三五年の創建という。

デモがあるといってセンターを警察が封鎖していたが、ガイドが日本からきたのだからと、何回も頼んでようやく入ることができた。

サンフランシスコ派はカテドラルと対抗して各地に壮麗な寺院を作っているが、このサンフランシスコ教会も同じで内部は大聖堂よりも立派である。地下墓地があり、人骨を頭蓋骨、手、足などに分類して箱に入れて並べられている。なぜこういうことをしたかは判らない。近くのサン・ドミンゴ教会もドミニコ会の財力で作られたもので、青色のタイルは、スペインのセビリアへ発注されたという。植民地の布教争いか。ここも、地下に人骨置き場があるという。

七月五日リマ滞在。昨日も食事した日秘文化会館にゆく。ここは、ぐるっと高い壁で被われ、入り口にはガードマンが見張っている。日本人クラブのような施設で、食堂、売店、資料館、集会所などがある。こんな施設をつくらなければならないほど治安が悪いらしい。

ペルーへの日本人の移住は、第一回が一八九九年の佐倉丸で、七九

〇人が渡り、以後六七回まで続けられた。四年契約で英国人の農園に雇われ、給料は月二・一ポンド（約二五円）だったという。募集費と運賃一〇ポンドは農園主が負担した。明治三〇年頃の給与とすると、そう悪くはなかったような気がするがどうだろう。

いまは、日系人が日本に逆に出稼ぎに来ているが、運転手は越谷にいたことがあるといい、姉は越谷でペルー人相手にペルー料理の店をやっているとの話だった。

日秘会館で案内の日系三世（日本語は話せない。英語である）の世話でタクシーと交渉して貰った。インカの秘宝を展示する黄金博物館にゆき、一時間待って天野博物館に送って貰う約束で三〇ペソ（約一〇五〇円）で決める。

黄金博物館の展示品は日本にも二回くらい来たことがあるが、黄金の壁飾り、黄金の手袋、黄金の祭具、銀のスカートなどだった。銃器武具のコレクションもふつうではない。入場料は二〇USドルくらいだったと思う。ペルー人を相手にはいないということだろう。

天野博物館は着任五ヶ月の日本人学芸員に



リマの大統領府・フジモリさんはかつてこの主だった

案内していただいた。予約すれば入場無料。織物がすごい。一〇〇〇年まえの布地が残っている。綺麗に鉄製ケースに一枚づつ入って保存されている。すべて副葬品とのこと。この方は織物の歴史を勉強のため来ている。また、じやがいも、さつまいもは、南米が原産地との説明もあった。丁寧な一対一の説明だったので、一〇USDを寄付した。

リマからブエノスアイレスに戻る 七月六日、サンチャゴ経由ブエノスに戻る。中央駅に近いビジネスホテルを九五ドルで確保していたが、一七〇ドルのシェラトンに比べ、感じがよかった。ホテルの値段は当てにならない。

ホテルに講談社から校正原稿が届いていて、すぐ修正して送稿する。これは大失敗で三二ドルもとられてしまった。受信料を取り、送信も取る。すぐ近くに送信ブースがあるの知らずに失敗した。海外のホテルから、まとまったFAXには注意が必要だ。

失敗談ばかり書くが、外国はうまく行かなくて普通と、思っていないが、自分に腹をたてている。

独 フランクフルトへ ブエノスを出て、ルフトハンザLH五二七でフランクフルトに向かう。一Fビジネスクラスの四A/C席だからいい席なのだが、大西洋は揺れが激しく、一晩中続いた。

機内サービスは過剰気味。前部席に五、六人もついて、あれだこれだで大騒ぎだ。静かにしておいて欲しいと思った。

フランクの空港からは鉄道で中央駅に。近くのメリアアンパークホテルに入る。ここは中級だが駅に近く、清潔でリーズナブルな価格のいいホテルだった。ここを基点に数日、ルクセンブルグに行ったり、

ライン川沿いを鉄道で動くことにした。鉄道の旅には、荷物はカートに納めること、駅に近いホテルの確保が必須だ。

フランクフルトから出かけた町は、ルクセンブルグ、ケルン、ボンだった。ルクセンブルグへは、飛行機なら三〇分というが、我々は列車で行くことにした。ライン川沿いにコブレンツまで北上し、ここからモーゼル川に沿ってルクセンブルグに向かう。

モーゼル川沿いは、葡萄畑が続いているが、割合小規模で、すごい葡萄園とは感じない。甘口のモーゼルワインは、初めての訪欧以来のフアンで昔から好きだけれど、畑の風景はさえないかった。畑を飲むわけではないので、どうでもいいのだが、少しガッカリした。

ルクセンブルグとの国境の駅T R I E Rにつく。ルクセンブルグ国内も、同じくドイツ国鉄DBの経営だが列車を乗り換える。車内で乗車券を求める。切符は手書きで、一人七・四ユーロだった。ルクセンブルグ駅まで



ルクセンブルグの街

は国境から五〇分である。

そのあとは大変だった。ある銀行の友人を訪ねたのだが、タクシーにいうとすぐそこだから歩いてゆけといわれる。その店に行くところいう職員はいないとのこと。アポを取りながら大失敗である。

旅程の管理ばかりに気を使い、相手の場所、交通手段に注意しなかったトガメが出たのだ。ようやく行く先を突き止めて、再度駅に戻りタクシーを拾って友人に逢う。大幅な遅刻で話し合い、食事のあと、町を案内して貰う時間がなくなった。案内図を貰い、自分らだけで町を歩くことになる。

友人は中国人だが、英、独、仏語を話し、ヨーロッパに一七年いるという。仕事熱心な女性だった。食事はセントラル地区の中華レストラン。どこの国も同じだが、セントラルは人々々だ。市街に豪華さはないが建物は清潔。オトギの国ではないが綺麗な国。市庁舎の前はレストラン広場になっている。

この国の人口は四四万、三割以上が外国人という。国外から通勤している人も多い。面積は神奈川県くらい。王宮には衛兵がおり、軍隊も何百人がいるらしい。市庁舎、カテドラル、と小さな官庁街は歩いて廻ってもすぐ終わる。

翌七月一日、ケルンに向かったが大雨で、駅前の大聖堂に飛び込む。大勢の雨宿り客がいたが、奥ではミサをやっていた。大雨では仕方ないので、大聖堂だけを見学して戻ることにする。帰途ボンに寄り、大聖堂、市庁舎、ベートーベンの生家（博物館）を見学した。

日本のガイドブックを見ながらベートーベンの生家を探したが、なかなか分からない。二人に聞いたが駄目（英語では分からず）、三人目に停留所待っていたご婦人に尋ねたところ、バス一台を見送って、



ボンのベートーベンの生家

すぐ近くまで案内し、「二つ目ではない、二つ目を右に曲がるのだよ」と英語で丁寧に教えてくれた。旅先の親切は身に沁みる。

生家は小さな博物館になっていて、ベートーベン協会の所有。入場料四ユーロだった。ベートーベンのライフマスクとデスマスクなど一五〇点のコレクションを展示する。彼の一家がこの家に住んだのはベートーベンの生後数年といわれるが、ボンに残る住居はここだけとか。

ボンからフランクフルトへの帰りは、散々待つて列車に乗ったが、居眠りをして目をさましたら、ライン川の反対側を走っているではないか。列車が違う。驚いて通りかかった女車掌に、フランクに行きたいのだが、どうすればいいかと聞く。

彼女はニッコリ笑って、この列車はエアポート駅に停まるという。それならエアポートで乗り換えればいい。この列車はラインの反対側

を走って、マインツだけ川を渡って同じ駅に入り、また対岸に移り、空港駅に寄って分かれていった。ライン川を行ったり来たりする列車があることを初めて知った。

ダブリンへ 七月一日、フランクフルトからロンドン経由ダブリンに向かう。ブリティッシュ・ミッドランド航空で地図の通りの海岸線をたどって着陸。空港からタクシーで、メリディアン・シェルボーンホテルに着く。この町一番の豪華ホテルで、博物館のような部屋だったが、快適かといわれればそれほどではない。伝統的高級ホテルは格式が高く、豪華だが、隅々まで行き届いているかという点、古いだけに無理な面がある。

新しい、または改装したアメリカ式豪華ホテルの方が、安くてゴウジャスな感じである。これまで、ストックホルムのパレスホテルにもオックスフォードのランドルフにも泊まったが、同じことを感じた。

翌日はまずトリニティー・カレッジへ。この一番の宝はケルズの書で



ダブリンのトリニティーカレッジ

ある。本書は、九世紀はじめに、バイキングに追われて、ダブリンの北西六・五キロのケルズへ逃げてきた修道僧が作った豪華装飾の四つの福音書で、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝からなる。アメリカ伊能大図でもめた三〇ルックスと思われる暗い部屋のケースに収められ、見ようとする人でごったがえしていた。毎日めくられている頁が変わるのだという。

階上になると、図書館のロングルームの広大華麗さと展示物のバラエティに驚く。ヨーロッパには装飾的な図書室は色々あって、ポルトガルのコインブラの大学では金ピカの装飾図書がギッシリつまった図書室を見たことがあるが、ここはまた格別の大型図書室だった。廊下中央にはガラスケース入りで数十冊の希書を展示する。一八三〇年代の絵画の細密印刷。一八五八年の新聞縮刷などが目を引いた。

二日間、バスで市内観光。クライストチャーチ大聖堂、国立博物館、郊外のマラハイト城などを見学。大聖堂では高齢者の聖歌隊が制服を着て声を張り上げていた。国立博物館には葵の紋が付いた尾張徳川家の乗輿があつてびっくりした。

ダブリンの町全体に活気があると感じたが、これはオフショア地域になってからだという。要するにこれだけの町を香港化したのである。規制解除の影響は大きい。

町に日本レストランを見かけないが、中華レストランがないのにも困った。食事の制約があつて、洋食のみはきつかった。散々探したら、ホテルの近くに中華があつたなど、あきれた失敗談もある。

それからバブ。夕方になると、男女が着飾ってバブに集まってくる。私のホテルは名門ホテルなので立派なバブがあるが、溢れてロビーま

ではみ出す紳士淑女で夕方になるとむせ返っている。

つまみを食べないでビールだけ飲んで、わいわいがやがやと、しゃべりまくっている。ビール一杯の社交場ということであろうか。ホテルを一步出ると、近くにそういうパブが沢山あり、どこも人々々々、道路まで溢れている。毎日来ても、ビール一杯ならたかが知れている。これがパブ文化というものかとあきれ、また感心した。

レーキヤビツク ダブリンのあとは、なかなか行けないアイスランドのレーキヤビツクに行くことにした。大西洋に浮かぶ島国で人口三百万人あまり。ただし一人当たりGNPが高い国だ。一番知りたかったのは何が高いGNPを支えているのかである。

スターアライアンスで世界一周を完結するため、ダブリンからコペンハーゲンに飛び、ここからアイスランド航空でレーキヤビツクへ。エアポートバスで、ホテル・グランドパレスにチェックイン。空港からホテルまで荒地ばかりだった。

とにかく寒い。七月はじめなのに気温は一〇度。しかし暖流の影響で、冬でも五度以下にはならないそうである。気候は雨が降ったり、止んだり。三日滞在の間、晴天は一日もなし。

一九七五年の建国だから新しい国で、建物は皆ピカピカ、一部に古い家が混じるという感じ。しかし、漁港といってもたいした船はいないし、工場らしいものもない。農地は見当たらず、野菜が少ない。生活物価は日本の五〇%増くらい。

何で食べているのか全く分からない国だ。何かの利権を持っていって国民一人あたりにすると、GNPを押し上げるのかも知れない。日本レストランはなくて、チャイニーズが寿司や天婦羅をやっている。お

寿司は高かつ

た(八個で二、四〇〇円)がおいしかった。

ブルーラグ

ーンという温

泉がある。荒

地に白色の温

泉の湯のため

大ブルーにし

たもの。底は

砂、水着で入

る。脱衣場、

休憩場完備、

レストランも

ある。ここは

少し変わった

観光地だった。

ツアーがあ

って一行は七人だった。博物館、大統領邸と付属教会、大涌谷のよう

な噴煙地、断崖の営巣地などを見ながらブルーラグーンまで連れてい

ってくれた。

結局アイスランドは分からない国だった。

帰りはコペンに戻り、SASに乗り換えてダイレクトに日本に戻る。総日数三七日、世界一筆書きの大旅行が終わった。

完



アイスランドの小さな国会議事堂

伊能古文書教室・佐原伊能家史料を読む

『旌門金鏡類録』 (六)

小島 一仁

箱訴願人呼び出し

『金鏡類録』第三冊に入る。これは、墨付紙一三〇枚に及ぶ記録であるが、その大部分は、前回に記した寛政十一年十二月と十二年正月に提出した箱訴に関する記述で占められている。

勘定奉行柳生主膳正から箱訴願人に対して呼び出しの差紙が来た。最初の差紙は寛政十二年閏四月十九日（一八〇〇年六月一日）の日付で来た。その日は、正に、忠敬が蝦夷地測量に出発した日であった。以後、六月五日、六月二十四日、七月九日、七月二十六日及び八月八日の日付で、前後六回にわたって差紙が来た。その度に、箱訴関係者が何人かづつ奉行所へ出頭して役人の尋問に答えたり文書を提出したりした。第三冊には、その様子が逐一記されているが、その内容は、細かいことは別として、大筋では、箱訴願書に記されていることと同様である。

しかし、最初の出頭の際に願人たちがのべたことの中に、他の史料では見られないことも記されているので、それを原文で紹介しておく。伊能家の家業等に関する尋問に願人たちが答えた部分である

右家内人数、中爲五男、左衛門より暇と相弁不申候得共、式拾四五人餘も御座候趣申上之、商売向御尋、藤左衛門より米穀商仕又は酒造商売仕候、与左衛門より酒造仕候砌は米春奉公人式拾五六人宛抱申候、八月頃より二三月頃迄雇候間其時都合五拾人位も有之由申上之、農業も致し候哉之御尋、源兵衛より高百石餘所持仕候故上

○ 解説文

右家内人数、中爲五男、左衛門より暇と相弁不申候得共、式拾四五人餘も御座候趣申上之、商売向御尋、藤左衛門より米穀商仕又は酒造商売仕候、与左衛門より酒造仕候砌は米春奉公人式拾五六人宛抱申候、八月頃より二三月頃迄雇候間其時都合五拾人位も有之由申上之、農業も致し候哉之御尋、源兵衛より高百石餘所持仕候故上

り田畑も有之荒し候而は御上御地頭所^正対し不相濟候連、作男式人女三人も相雇農業も仕候趣申上之、家内之者分而御尋、与左衛門より三郎右衛門夫婦外^ニ兄弟三人欸と覺候、藤左衛門より当三郎右衛門父勘解由當時江戸深川辺^ニ隠居仕罷有候、家内人数之内店召仕六七人下女は五六人有之候趣申上之、右兄弟三人之御尋、同人より姉は上総国智実家之方^ニ罷有、妹壹人先年死去仕候、外^ニ妹壹人十一才計^リ之者有之候由申上之、酒造高何程造候哉之御尋、同人より凡千石余も酒造出来可申候勿論年柄^ニ寄増減も有之由^ニ而睨と相分り不申候様申上之、酒造藏穀物入置候藏等間數御尋、源兵衛より酒藏式拾五間^ニ拾八間程之曲り穀藏三間^ニ九間之藏二ヶ所三間^ニ五間之藏三ヶ所有之由申上之、

この記述によると、伊能家の家内人数は、ふだんでも、二四〇五人くらいはいたようである。その内分けは三郎右衛門（景敬）夫婦の外に「兄弟」三人、農業雇人男二人女三人、店（米穀商、酒造）の召仕六〇七人、下女五〇六人と記されている。だが、この時期には、伊能家は川岸問屋をつとめ高瀬舟も所有していたので、その方の雇人もいたかもしれない。また「兄弟」となっているが、記されているのは、上総国の智の実家の方にいるという姉のイネ、先年死去したという妹のシノ、十一歳になる妹、庶出のコトの姉妹三人だけで、次男の秀藏（敬慎）のことは、どうしたわけか述べられていない。秀藏は庶出であつたためか若い頃に他家に入つたようであるが、このときは、まだ十四歳で、忠敬の蝦夷地測量に助手として同行していて、忠敬は測量日記の『蝦夷于役志』にも、伊能・秀藏と明記しているのである。

ともかく、伊能家の家内人数は、ふだん、二四〇五人であつたのに秋から冬にかけての酒造期間には「米春（こめつき）奉公人」を抱えるので、五〇人にもふくれ上がったという。

伊能家には、それだけの人数を半年以上も寝泊りさせることのできる家屋のほかに、大きな酒造蔵一棟と穀物蔵が五ヶ所にあつたようである。当時の伊能家の屋敷は、現在残されている「忠敬旧宅」とはくらべものにならぬ広大なものであつたらしい。

もう少し読み進んでいくと、伊能家の財産に関することが出てくる。これは、解説文で示すことにしよう。

三郎右衛門身上向之儀は五万両も八万両も可有之哉如何と御尋、中々左様^ニは有之間敷と申上候所、三四万両も有之候哉之御尋、其儀は睨と難相分旨申上候所、夫は睨と可存儀も無之世間之風聴^ニは何程可有之様子^ニ候と御尋、与左衛門より風聴^ニは三万両位も可有之趣申之、

伊能家の財産が、実際にどれほどあつたかは別として、「三万両くらい」という噂があつただけはわかるであらう。

箱訴一件落着

もう一つ、箱訴願書には書かれていないことで、火災のときに焼家の人たちを助けたことが出てくる。そのこと自体は、大して重要な事とは思われないが、江戸時代、佐原も他の町場と同様に度々火災にあ

った。ここで、それについて、少しばかりふれておきたい。

佐原で最大の火災は、伊能景利の時代、享保七年（一七二二）十二月二十四日の夕刻におこった。このときは、『金鏡類録』には全く出てこないが、景利が編集した『部冊帳』第二十一卷（佐原市史資料編・別編三・部冊帳後巻2）に、景利自身の筆で記されている。

佐原村新宿の関戸から火が出て新宿の大半を焼き、火は本宿側にもうつって天方主馬知行所本宿組の家々を焼き払った。景利は、地頭所に出した「御注進状」に次のように記している。

此方様御知行所百姓不残類焼仕候、夥敷大火^三而、何も難儀仕候拙者居宅も不残類焼仕、酒蔵も壹軒焼失難儀千万奉存候

このときは、伊能家も類焼して、「難儀千万」で、他の羅災者たちを助けることなど、思いもよらなかったであろう。しかし、この後におこった二度の火事に際しては、伊能家に「奇特」の行いがあったのである。それは『金鏡類録』に記されている。

焼家之者^二奇特之訳御尋、廿五ヶ年以前同村八日市場と申所より出火いたし隣町五六町類焼仕、家数貳百軒余も御座候、此節焼家之ものへ早速食焚出し遣し其上銭貳百文三百文或ハ五百文宛遣し候趣^三御座候、十六ヶ年巳前中町出火之砌、類焼三十五六軒有之候節も早速食焚出し味噌香之物等迄相添軒別^二遣し、其上銭五百文宛銘々差遣し申候趣申上之

「廿五ヶ年以前」というのは、安永四年（一七七五）、「十六ヶ年巳

前」は天明四年（一七八四）であるから、いずれも、忠敬が伊能家の主人であったころのことである。これらの火災についての史料を、わたしは、ほかにはまだ見たことがない。つづいて、奉行所役人の尋問に答えて、忠敬父子が老年者、産婦、潰れ百姓、困窮人らに対して「奇特」の取りはからいをしたことや、母（景敬の母・ミチ）の一七回忌に佐原村ばかりでなく近村の貧人たちにまで一軒五〇〇文づつの喜捨をしたことなども記されている。また、代官所からの命により、寛政十一年から三年間の三郎右衛門所持の新田の反高とその年貢及び他の運上物についてくわしく記した「書上帳」（墨付紙八枚）の写しが載っている。

以上のような経過があった後、寛政十三年（一八〇一・享和元）正月二十九日、伊能景敬・忠敬父子は勘定奉行柳生主膳正役所に呼び出され、次のような「御書附」を受けた。

（前文略）右鉢先祖より数代申送り相守、惣て村方為に相成候儀とも常々取計候段奇特之志^二付、為御褒美三郎右衛門^一銀拾枚被下置、苗字は子孫迄名乗帯刀ハ其身一代御免被下、勘ヶ由儀は銀拾枚被下置、苗字帯刀共其身一代御免被成下

そして、箱訴願人たちに対しては、「両度ニ御箱訴いたし候段、神妙之事ニ付褒置」との申し渡しがあった。

その後、およそ一ヶ月の間、三郎右衛門（景敬）は、地頭所その他世話になったところに札に廻ったり、他から祝儀をうけたりしていたが、一息ついたところで、幕府から「頂戴」した「御銀」のあつかいに手落ちのないように気をくばって、大切に保管すること

同廿九日夕方、先月廿九日頂戴仕候御銀拾枚宛式包桐白木二重箱

江入、奥座敷床江備
調燒肴供之候

三月二日、右床^江相備候御銀拾枚宛式包二重箱入文庫藏先祖長持
江入置

幕府からいただいた褒美であるから、大切にすることはわかるが、それを「御銀」と呼び、桐箱に入れて奥座敷の床の間に置いた上、御神酒、赤飯、焼魚を備えたのは、神様に対するあつかいのようである。その後、この「御銀」は、伊能家の宝物として文庫蔵の先祖から伝えられた長持の中に入れて置かれたという。

これで、箱訴一件に関する記述は終りかと思つたら、まだ、つけ加へが二つあつた。その一つは、六月になつて、伊能三郎右衛門は新右衛門という者から高瀬船一艘を買入れたことで、川船役所へ出した買船証文が記されていることである。ここに、どうして高瀬船のことが出てくるのかと思つたら、買船証文のあとに川船方手代に対する手紙がつけられていて、それに「尚以右伊能三郎右衛門儀当正月廿九日御勘定奉行柳生主膳正様於御役所苗字帯刀御免被仰付候、依之苗字名乗申候、此段為念申上置候、以上」とある。幕府から苗字帯刀を公認されてから、この時はじめて、公式文書ではじめて伊能の姓を用いたので、そのことを、ここに書きとめておいたのであろう。

もう一つ 七月に入つて、景敬は、箱訴願人たちに対して、一件のために費した費用の全額、「金六拾五兩貳朱四百七拾五文」を支払ったことが記されている。次に、それに対する願人たちの受取書を原文で紹介しておこう。

一礼之卒

又爲此之祖天宗年仲市東村而居焉故其本村方一畝餘而世族
 之國憲式雅臨一面與敝代之者公雲物之故有找求之祖祖月
 百餘下名度而外之予之極者爲此中敝代之祖連言其所以有甚此
 居當當代之凡代之者其子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 也其子孫而面下合密之去未等名甲申之月敝代之祖連言其所以
 柳生之應之樣之樣也其子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 山公儀陳子之祖子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 什合其子孫之祖子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 思之也其子孫之祖子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 也助合其子孫之祖子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處
 信之也其子孫之祖子孫亦猶之祖與子孫及別之而華處

一金之指文或云朱
源江有七指文

石一併中路裝用

清入用令

享和元年 丙 七月

(願人八名連署捺印あるが省略)

一札之事

一貴殿御先祖天正年中より佐原村御住居被成、万事村方之儀深切御世話被成、其上困窮或は難渋之百姓相救代々孝心奇特之儀^{ニ付}、我等先祖組内百姓申合度々御願可申立趣相催候処、貴殿御先祖達而差押候^{ニ付}其促^ニ相成居候処、当代迄凡十代程不相替引続奇特之趣殊更貴殿御儀別^ニ面^ニ万事厚^キ御取計^イニ^{ニ付}、我等申合蜜^ニ去々

未暮去申正月両度御箱訴仕候処、御奉行所柳生主膳正様御呼出し右之始末御糺之上、当正月二十九日一同願之通從御公儀様貴殿御親子^江結構^ニ被仰付、我等誠^ニ先祖より之願望相違重々難有仕合^ニ奉存候、然所右一件諸入用之儀我等組内百姓割合^ニ可致候処、貴殿より思召を以て右願立候故誠^ニ結構御褒美被付候為御祝儀右入用分不殘御助合被下、此度左之通金子^ニ儲^ニ諸取願中諸勘定不殘相済奉存候、依之為後日請取一同連印^而如件

一金六拾五兩^ト

銀四百七拾五文

右一件中路雜用^并臨時共

諸入用金

享和元年^西七月

寛政の伊能家箱訴一件のことは、『旌門金鏡類録』の第二冊、第三冊を通して、くわしく書き綴られている。そして、最後は、この「一札之事」によってしめくくられているのである。

ペイレ図が日本で永久保存に

京都市の日本写真印刷が購入

京都の印刷会社、日本写真印刷はフランスのペイレさんの屋根裏で三十年前に見つかった伊能中図をペイレ夫妻から買い取ったと発表された。地図は既報のように傷みが激しいため昨年から修復と展示のため一時的に日本に持ち込まれていたが、本来は日本にあつて価値を認められるべきだ」との夫妻の意向に沿い、地図の修復にあたつた同社が

購入して保存することになった。

買い取つたのは「中図」八枚。八枚そろっているのは東京国立博物館など三部しか見つかつていない。立ち合つた渡辺代表によれば、この地図は幕末ごろ持ち出されたと推測している。

日本写真印刷は今後、博物館に寄託して公開するなど、保存と公開について検討していくという。それにしても、ペイレ夫妻の英断はすばらしい。この地図は伊能図だが感謝の気持ちから、いつまでもペイレさんの伊能図と呼んだらいいだろうか。（福田弘行）

「完全」伊能中図 仏から

修復が縁、京都の印刷会社購入

仏中部のティヨン近郊、東京国立博物館所蔵の伊能中図（全図）を修復した京都市中京区の日本写真印刷（全川宏社長）が17日、フランス人所有者から同図を購入した。日本全体がそろつた中図は国内で3組しかなく、歴史的にも貴重といひ、研究や展示に活用していく。

伊能中図8枚が並べられ、日本列島が浮かび上がった。京都市中京区で

一部は修復がひとけたため、03年から04年にかけて同社で修復。今春から神戸など全国4カ所の展覧会に公開された。中図は1枚が約2400平方センチ、8枚を合わせた日本列島を網羅する。研究会によると、伊能の「大日本全図」は全図1枚、大図（約3万6千分の1）と中図、小図（約3万6千分の1）の3種類がある。現存する3組の中図の



朝日新聞 2004年11月17日
京都版・夕刊

続・伊能忠敬未公開書簡より その一

これから何回かに分けて掲載する書状は伊能忠敬自身のものではなく、忠敬の身边的人々の書簡である。

伊能忠敬宛 渋江新之助書簡 B-217

伊藤 栄子

〔解説文〕

伊能勘解由殿 渋江新之助

以手紙申達候 然は

其元願書昨日

被差出候二付、即日

大和守殿へ差出候

処、先刻加筆附札

被致認直、今夕迄二

差出し候様、被相達候

二付、認直之義

可申達候所、差懸候

義二付、認直被致

伊能勘解由殿へ
以手紙申達候
其元願書昨日
被差出候二付、即日
大和守殿へ差出候
処、先刻加筆附札
被致認直、今夕迄二
差出し候様、被相達候
二付、認直之義
可申達候所、差懸候
義二付、認直被致

【口語文】

手紙を以って伝えます。さて、昨日そちらから差し出された願書、その日の内に大和守殿へ提出した処、先程、加筆付け札の上戻されました。同書類は夕刻までに、書き直し再度さし出すよう御達しがありました。書き直しについては、そちらへ持つていつて直していては、万一手間取ると、夕刻までに、提出できなくなります。丁度、当方にも書き物があり、序だから懸紙の通り書き直して、使いの者に持たせましょう。そちらでは懸紙に調印だけして、使いの者へ渡すように、尤、加筆した懸紙も一緒に、使いの者へ渡して下さい。早々以上

九月三日

候二ては、万一手
間取被申候へは
夕刻迄二は難差出
候二付、則懸紙之通
認直させ為持差
進候間、被致調印
直二此もの二可
被相渡候尤加筆
懸紙有之候も、此者二
可被相渡候 右
可申達 早々以上

九月三日

手紙を以て伝へます。さて、昨日そちらから差し出された
願書、その日の内に大和守殿へ提出した処、先程、加筆付け
札の上戻されました。同書類は夕刻までに、書き直し再度さ
し出すよう御達しがありました。書き直しについては、そちらへ
持つていつて直していては、万一手間取ると、夕刻までに、
提出できなくなります。丁度、当方にも書き物があり、序だ
から懸紙の通り書き直して、使いの者に持たせましょう。そ
ちらでは懸紙に調印だけして、使いの者へ渡すように、尤、
加筆した懸紙も一緒に、使いの者へ渡して下さい。早々以上

渋江新之助の役職

渋江新之助が須田久米治郎の後任として小普請組の組頭になったのは、文化五年二月十四日であった。それ以来、忠敬は終生、新之助と関わりをもつことになる。では忠敬の属していた小普請組とは、一体どういう組織なのであろうか。

小普請組は、家禄三千石以下の旗本、御家人で無役の者、つまり御城勤めをしない者が属していた。役職につけない士に、小規模の普請をする時、幕府は人夫を集める役を課した。小普請の名はこれに由来する。その後制度は改められ、禄高に応じて金を納めるようになり、夫役は無くなり、小普請組という名だけは、そのまま残された。

非役であっても幕府の直参であり、高禄の者は寄合組に、それ以下者が小普請組に編入された。小普請組は年代により八組または十組に編制され、各組に小普請支配が置かれて、その下には組頭、世話役がいた。この幕府の役職の者が組衆の面倒をみていた。渋江新之助はその組頭であった。

忠敬は測量に携わる時以外は無役となり、その間は組頭の支配を受ける。小普請には、無役の中でも老幼の者、疾病の者、また罪科や職務の失敗で免職された者もいたのである。

江戸日記には、忠敬と同じ組内に河内山宗春の名が見える。彼は江戸後期の茶坊主で、のちに水戸家江戸屋敷の富くじ興行を種に、同家をゆすり捕われた。これを河竹黙阿弥が歌舞伎に取り上げたので、河内山は有名になった。芝居では宗俊という。こういう者がいたことは事実で、こうした手合と忠敬先生が一緒では何とも納得がいかない。しかし彼が悪事に手を染めたのは、忠敬先生の亡くなられた後で、た

また河内山宗春が同じ小普請に居た、という事なのである。これは幕府による編制であり、忠敬は文化五年には63才であったから、おそらく老幼の中で扱われたのではないか。河内山宗春の住居は当時、神田山本町代地と記されている。代地というのは、没収された知行の代わりに、与えられた知行であるから、ここが住居とは限らない。調べてみると、下谷練堀町となっていた。下谷なら浅草に近く、地域的に分けられたと見てよい。ちなみに、宗春の恐喝は、相手が御三家の水戸家に関する事なので、幕府は表向きの裁判にもできず、彼は牢内で密かに毒殺されたという。文政五年のことである。

前述のように、小普請は非役の組織なので、世話役の主な仕事は組衆の就職の斡旋であった。無役のままで幕府から禄を受けていては、今でいう税金の無駄ずかいと同じで、当時の社会でも「小普請入り」という言葉には、冷ややかな世間の批判が込められていた。その非役の者達が支配に会う日が定められていた。つまり就職のための面接日である。組頭との面接は月に二回、十四日と月末であった。この日を「逢対日」といって、この「逢対日」という言葉も、忠敬の江戸日記には度々出てくる。意味を理解して読むと、江戸日記は大へん面白い。忠敬は測量の旅から帰ると、御世話になった諸藩の江戸屋敷、暦局、その他の挨拶廻りと共に、組頭、支配宅へも必ず立ち寄っている。毎度のこと乍ら、まことに几帳面であった。

この書簡は事務的な内容で、比較的短い文である。忠敬が大和守へ差出した願書に不備があった。組頭渋江新之助からの手紙によると、今々までに差出さねばならず、時間もないので当方で書き直して使いに持たせるから、捺印だけして使いの者へ渡すようにとある。ここま

での配慮は、老齡の忠敬への氣遣いのみではない。生活の折目節目を大切にしてきた忠敬先生の人徳であらう。

参考文献

江戸役人、職人大辞典 人物往来社
新潮人名辞典 新潮社
江戸の旗本たち 河原芳嗣著 アグネ技術センター



尺時計・しゃくとけい

尺時計を展示

伊能忠敬記念館

第39回収蔵品展 1月25日～3月21日

国指定重要文化財「伊能忠敬遺書并遺品」から大図5点

佐原市指定文化財 尺時計（しゃくとけい）個人蔵

尺時計は写真のような箱状の柱時計の一種で「伊能東河器用」と刻まれています。上の小箱内に機械が入っており、その下に文字盤が縦

に付いています。時間を示す針は、文字盤の左側を、時間を指しながら降りてくるのですが、現在は紐が切れているので下がりがきつた状態です。この種の時計は江戸時代後期に普及し、比較的裕福な家で用いられました。全長が1尺（約30・3cm）前後のものが多く、尺時計と呼ばれていますが、展示した時計は約58cmもあるかなり大型のものなので、むしろ2尺時計というべきかも知れません。動力は針がついている錘だけです。これが一日かけて一定の速さで下がってきます。一日で降りきってしまうので、毎日ある時間になったら専用のネジを使って上まで錘を巻き上げる必要があります。そのため時計の下には、ネジをしまうための小さな引き出しもちゃんと付いています。

現在は一日を一時間ごとに24等分していますが、当時は12の時にわけていました。ですから尺時計の文字盤も、12に分かれている数字が等間隔ではないことに特徴があります。等分すれば一つの時は約2時間にあたりますが、江戸時代の1時は不定時だったのです。これは季節によって長さが異なる昼と夜をそれぞれ6等分するために、昼と夜では同じ1時でも時間が異なるのです。

尺時計は年に何度かは、数字の位置を調節しなければなりません。調節する数字の感覚パターンは13通りでしたので、やがて調節済みの13枚の板をそろえておいて、板ごと取り替える方式が考案されます。展示した時計も文字盤の上下二ヶ所に止め具がありますので、この取替式だったのかも知れません。また、この時計には機械の上部に天府（てんぷ）という振り子のようなものが付いています。これが箱の内側に当たるカチカチという音で、時計が動いていることがわかる仕組みになっています。でもこの時計の持ち主にとっては、その音が少々うるさかったのでしょうか、音が出る穴を紙で塞いでいるのです。人間味が伝わってくる、何ともほほえましい痕跡です。

伊能家文書紹介 四

B 〇〇一 麻田立達宛 足立左内書簡

文化一一年一月（伊能忠敬自筆カ写）

安藤 由紀子

「原文」

南正月足立氏ヨリ麻田氏へ
来り候年始状之端書

一、小子去春日、松前へ罷越候てより彼地
在留之魯西亞人、七人之内、
ゴロウイン、モウル、レフニコフ

ゴロウイン、モウル、レフニコフ

右三人之者ハ、頭分之者ニ御坐候故、

日々罷越、對話仕言語稽古いたし候

ゴロウインは、カビタン、酋長之儀ニ候へは、

秀才も有之、又モウルは、固ヨリ航海

之者（二）非ず、文官之者ニ有之候由 甚以

世塵ニ秀才之者ニて、人前よく御坐候

ゴロウインもカビタン酋長に當りては、
秀才も有之、又モウルは固ヨリ航海
之者（二）非ず、文官に當りては、
世塵ニ秀才に當りては、人前よく

「訳文」

当正月足立氏ヨリ麻田氏へ
来り候年始状之端書

一、小子去春日、松前へ罷越候てより彼地

在留之魯西亞人、七人之内、

ゴロウイン、モウル、レフニコフ

右三人之者ハ、頭分之者ニ御坐候故、

日々罷越、對話仕言語稽古いたし候

ゴロウインは、カビタン、酋長之儀ニ候へは、

秀才も有之、又モウルは、固ヨリ航海

之者（二）非ず、文官之者ニ有之候由 甚以

世塵ニ秀才之者ニて、人前よく御坐候

[illegible]

レフニコフは、船司にて御坐候 数学を
能いたし、毎々天学之事を、談論二
及候處、小子如キの、不才薄学之申聞
候之處二有之候得共、最早日本二も、左様二
相聞ケ有之候哉と、甚感心いたし居候
察候處、此地ヨリ漂流人、幸太夫、新蔵、
磯吉、又ハ仙台、石巻之者共二至迄、
皆船乗之儀、殊二我日本之掟として
他国へ航海は不相成、夫故日本人皆々
彼等之如キ文蒙之者と、相心得候哉と存候
又々日本中之談話と違ひ、異国之
者之説話を承り候事、大ニ面白く、
航海中之話二成ては、赤道下、又ハ
緯南之所へ参候話等、彼等申聞候

一、魯西亜人松前表二罷在候處、
 此度御返し二相成候二付、八月十七日
 箱館へ被差遣候二付、同所発足、右二付
 小子共も、同所発駕いたし、箱館表へ
 罷越候處、九月十七日、魯西亜船
 シアナ^{名船}、箱館表へ着船いたし候 船
 長サ十七八間、幅五六間、石火矢数挺
 相備有之、帆柱三本、帆数十三枚程も
 相見へ申候 右船之酋長イリコルツ^{名人}
 と申ハ、甚怪利之者二有之候 此者、則
 在留之者共を、迎ひ之為ニ参候 然ル
 處、段々上陸之上、對話有之、同廿六日
 引渡相済、同廿九日、魯西亜船、箱
 館表を帰帆いたし候
 一、魯西亜人松前表二罷在候處、
 此度御返し二相成候二付、八月十七日
 箱館へ被差遣候二付、同所発足、右二付
 小子共も、同所発駕いたし、箱館表へ
 罷越候處、九月十七日、魯西亜船
 シアナ^{名船}、箱館表へ着船いたし候 船
 長サ十七八間、幅五六間、石火矢数挺
 相備有之、帆柱三本、帆数十三枚程も
 相見へ申候 右船之酋長イリコルツ^{名人}
 と申ハ、甚怪利之者二有之候 此者、則
 在留之者共を、迎ひ之為ニ参候 然ル
 處、段々上陸之上、對話有之、同廿六日
 引渡相済、同廿九日、魯西亜船、箱
 館表を帰帆いたし候

「口語文」

(後略)

当年正月足立氏より麻田氏へ送られた年始状の端書

一、私こと昨年春松前へ参りましてより、この地在留のロシア人七人の内、ゴロウイン「ゴロウニン」、モウル「ムール」、レフニコフ「フレブニコフ」の三人の者は上級士官なので、毎日会いに行き、話し合い、ロシア語の勉強をいたしました。

ゴロウインは、カピタン（酋長）なので、学才があります。モウルは、航海技術者ではなく、文官の由 世に秀でた逸材で、美男でもあります。

レフニコフは船司で、数学の才あり、毎回天文学の話をしましたが、私のような不才薄学の者の発言ではありますが、もはや日本もそんなに開けているのか」と、いたく感心しておりました。

察するところ、日本よりの漂流人は、幸太夫・新蔵・磯吉・又は仙台・石巻の者共に至るまで、みな船乗りですし、日本の掟として、他国への航海は禁じられておりますから、日本人は皆彼らのように無学だと思っていたようです。

また、日本人と違い、異国の者の話はいへん面白く、航海中の、特に赤道下や南半球のことなど、興味深く聞きました。

一、ロシア人たちは当時松前におりましたが、この度お返しになることに決まり、八月一七日函館へ向け松前を出発させました。したがって私たちも函館へ参りました。

九月一七日、ロシア軍艦シアナ「ディアナ」号が、函館港へ入港しました。船は、長さ一七・八間、幅五・六間、大砲数台を備え、帆柱三本、帆数は二三枚ほど見えました。この艦の酋長は、イリコルツ「リコルド」と申し、甚だするどい人物でした。この者は、在留の者たちを迎えにやって来たのです。彼は上陸の上、諸方と対話、同二六日引

渡しが済み、同二九日に、ロシア船は函館港より帰帆いたしました。

（後略）

足立左内・麻田立達・伊能忠敬

この書簡は、表題にもあるように、足立左内が麻田立達へ出した年賀状の端書を、伊能忠敬が写し取ったらしきものである。大急ぎで書いたせいか、字体が少し違うように見えるが、伊能家の古い行李の中から出てきたものには違いない。

そこで先ず、この三人の関係を説明しておこう。

江戸中期大坂に、傑出した天文学者がいた。彼、麻田剛立は、幼年より天文・暦術を好み、又医術を修めた。杵築藩の藩医に抜擢されたが、天文暦学の独習のため、時を惜しみ、ついに脱藩してしまった。大坂に隠れ住んで、医を業としながら、自由な立場で、西洋天文学を独習し、「先事館」という塾を開いた。中国流天文学から西洋流天文学への交替期の、「麻田流天文学」の誕生である。

伊能忠敬の二人の師、高橋至時と間重富（大坂の微禄の同心と富裕な質商）は、ほとんど時期を同じくして、この塾に入門した。そして少し遅れて、同じく大坂の鉄砲方同心、足立左内が入門したのである。

麻田・高橋・間までは蘭語を解せず、中国天文書を通じて西洋天文学を学び、西洋の中身を溶かして、中国流の伝統の類型に注ぐやり方から抜けきれていない。高橋至時は死の前年、ラランドの蘭語の暦書を手に入れ、命と引き換えに、この書物に取り組み、コペルニクスの太陽中心説を採らざるを得ないところまで来ていた。四一歳の結核に

よる死を、さぞ無念に思ったことであろう。

天文現象に合わなくなった旧曆を改める必要のあった幕府は、天文方に高橋と間を招き、以後麻田一派が天文方の主流を占めるようになる。東西文明の衝突は、「麻田流天学」の隆盛をもたらし、この書簡がその一端を物語っているように、天文方は、西洋文化流入の窓口となっていた。

中央に出た弟子たち三人の書簡に散見する、師麻田一家への思いは、深く厚く、儒教の時代とはいえ、このような人間関係があったことに感動せずにはいられない。

麻田は脱藩を理由に、旧主に遠慮して、どこからの招きにも応じなかった。長く患って、晩年は窮乏のうちに六六歳で亡くなった。麻田剛立には子がなく、甥を跡継ぎに迎えた。この書簡の名宛人、麻田立達^{たち}がその人である。運の悪いことに彼は多病で、時には歩行もままならず、生活は困難を極めた。この一派のパトロンでもあった間重富は、望遠鏡のレンズの研磨を習わせ、この技術によって自活の途をひらき、立達の暮らしを支え続けた。弟子たちはこの養子とも、欠かさず連絡をとった。足立左内のこの年始状が、それを証明している。

この人々の関係をまとめると、麻田剛立を基点として直系の弟子が高橋至時と間重富、弟弟子が足立左内、孫弟子が伊能忠敬、養継嗣が麻田立達となる。伊能忠敬は、寛政七年に至時に入門したが、同一一年に没した師の師には会っていない。

ワシリー・ミハイロヴィッチ・ゴロウニン

日本人に捕らえられ、二年三ヶ月を捕虜として蝦夷地で暮らし、同じように東西文明の衝突に身をさらした同時代人がいる。

W. M. ゴロウニンは一七七六年、ヨーロッパロシアの片田舎で、

小地主だが由緒ある士族の長男に生まれた。足立左内より七歳、伊能忠敬より三一歳年少である。

一七九三年海軍士官学校を卒業、英国留学を命じられてフランスを相手とした海軍作戦に参加した。かのネルソン提督が、彼の勇敢さと海技の巧みさを賞賛したと伝えられている。帰国後「イギリス・ロシア両海軍の比較論」を発表、自国海軍の改革を主唱した。

フランス革命の余波が、ロシア支配層を脅かしている時代で、フランス啓蒙学派の論説を多く読み、広く世界を知るため、遠洋航海を好んだという。外国語に堪能、文学・歴史・地理学等学問一般に通じた、柔軟な判断のできる逸材であった。

かれが帰国後あらわした体験記は、その逸材ぶりを知ることのできる名著である。私は、これほど面白いノンフィクションを他に知らない。一気に読め、何度読んでも飽きない。本は、帰国二年後の一八一六（文化一三）年、皇帝の勅許により官費で出版されるや大好評はくし、出版後ヨーロッパの各国語に翻訳されて、版を重ねた。

日本では、長崎で入手されたオランダ語訳から、初版後わずか五年目に、蘭学者たちによって翻訳が開始され、一八二五（文政八）年「遭厄日本紀事」と題して出版された。

異教徒に対する偏見を全く持たず、誇張や粉飾なく、しかもフェアに、日本と日本人の本質を記したこの本は、日本を知るための最も信用のおける資料として、ヨーロッパの人々に読み継がれていた。

登場人物のスケッチ

この書簡の「写」の内容は、「口語訳」を読んでいただければ、それ以上説明の必要はないと思われるので、ゴロウニンの著作などにしたがって、書簡の登場人物のスケッチを付け加えておきたい。

足立左内は寛政八年から天文方にかかり、寛政・天保の両改暦に功があった。その間一時大坂に帰り、至時からの就職の世話も断り、二人の兄弟子、至時と重富に不勉強をなじられ、励まされ続けた。

ロシア人たちにとって釈放の希望が見え始めた文化一〇年三月、彼は、至時の長男で天文方筆頭をつとめる高橋景保の推薦で、松前への出張を命じられ、毎日欠かさず、捕虜たちのもとに通い、猛勉強を始めた。ゴロウニンたちは、この日本の学者に、「アカデミー会員」というニックネームをつけ、うんざりするほどの質問攻めに合いながらも、丁寧に応対し、その能力を高く評価している。この出会いのとき、足立は四五歳、ゴロウニンは三八歳であった。

彼は、足立を評価した理由を、数件あげている。大黒屋幸太夫の持ち帰ったロシアの算術教科書の翻訳を、彼の助けを借りてやり始め、説明しようとする中身はすべて分っており、そのロシア式教え方を知りたいだけだったこと、陰暦と陽暦の相違を正確に理解していたこと、日本ではラランドの天文書を翻訳しており、日・月食を正確に算定出来ると主張したこと、コペルニクスの地動説を真理と認めていたこと、対数表や正弦真数表などを見せると、すぐにそれと分り説明できたこと、ピタゴラスの定理を証明して見せたこと、等である。

七人の捕虜のうち士官は三人、残りの四人は水兵であった。序列はゴロウニン、ムール、フレブニコフ、水兵の順で、縄付きで外へ連れ出すときや、待遇の点で、日本側は、厳格にこの序列を守った。

三人の士官のうち最後まで正気を失わなかったのは、ゴロウニンだけで、特に「ムール君」は強度のうつ病にかかり、まだ三十歳前なのに、カムチャツカの土を踏んで十日目に拳銃自殺してしまった。字も絵も上手で、日本人の依頼を断りきれず、持ち込まれる数え切れない白扇に、絵やロシア語の文章を書かされた。若く美男子だったので、

ゴロウニンは、日本の貴婦人と恋に落ち帰国の助けをしてもらえないかと、夢想したと回想している。

「フレブニコフ君」は航海士で、末期を除けば、抑留期間の大部分、沈着冷静であった。九日間の、失敗に終わった脱走事件のときは、雑役夫から針を二本くすねて、羅針盤まで作った。白扇への揮毫を頼みに来た大勢の日本人たちに水兵たちが文盲なのを知られ、あきれられたためか、彼は忠実な部下たちに字を教え続けた。数学に強く、わが「学士院会員」氏も、たいへんお世話になったらしい。

伊能忠敬がどこでこれを写したか、あるいはこの写しを手に入れたかは、推測できる。最後の測量の帰路、文化一一年二月二五日から二九日まで京都に滞在し、どの日かに間重富と会って色々な情報を得たことが、忠敬宛の高橋景保書簡にみえる。麻田立達宛の書簡またはその写しを手に入れられるのは、生活全般の面倒を見ていた重富の外には考えられない。

忠敬は技術のみの人ではなかったから、この書簡を見せられたとき、長かった測量生活から現実引き戻され、大きく動きつつある世界の中にいる自分を実感したことであろう。

参考文献

- 中山 茂著『日本の天文学』 朝日新聞社
上原久外著『高橋景保の書簡について』 埼玉大学紀要第17巻
有坂隆道著『享和期における麻田流天文学家の活動をめぐって』 創元社
WMゴロウニン著『日本俘虜実記』（徳力真太郎訳） 講談社

再度大凶展が開催されるか

大図214枚が一堂に敷きつめた壮大な日本列島図で、実際に地図の上を歩いて、二百年前の偉業に感嘆の聲が発せられていました。

大図展にご協力ご支援頂きました各実行委員会及び関係者の皆様
に厚く御礼申し上げます。

なお、聞き及ぶところによりますと、今後も全国各地から「是非開催したい」という声が届いています。五月の鹿児島市から再度大図に会えるようになります。



女性が守ってきた「忠敬先生」の遺書・遺品

伊能 陽子さん

伊能家では、忠敬先生から伝わるさまざまな遺書・遺品の管理は、三代、女の仕事になっています。

まず夫の祖母に当たること。一方は五男の家次喜徳の長女と、重頼佐伯の伊能家の旧宅で生まれ、その後八十年の生涯を閉じましたが、歳に合った膨大な遺産を等分続け、大正から太平洋戦の後まで、兄子に訪ねた方々の「万金蔵」を残しました。

続いてこの両親、康之助・多壽子の時代には、嫁である多壽子が祖母の役目を引き継ぎました。そして、昭和三十一年に国

[illegible]

フジサンケイビジネスアイ 12月10日

会 場	入場者数	開催日数	人／日
神戸市立博物館	2 5, 4 6 6	3 2	7 9 6
仙台市科学館	7, 0 5 4	7	1, 0 0 8
仙台市博物館	3 0, 4 5 4	4 0	7 6 1
釧路市観光交流センター	2 2, 7 3 9	4	5, 6 8 5
札幌市中央体育館	4, 6 8 1	3	1, 5 6 0
帯広市十勝プラザ	3, 2 2 3	3	1, 0 7 4
熱海市MOA美術館	3 8, 2 3 5	3 4	1, 1 2 5
松山市総合コミセン	3, 5 5 6	5	7 1 1
広島県立美術館	1, 8 8 0	6	3 1 3
ナゴヤドーム	2 3, 7 6 6	2	1 1, 8 8 3
徳川美術館	3 8, 3 1 2	3 3	1, 1 6 1
武蔵大学	4, 5 0 9	7	6 4 4
新潟県立自然科学館	3, 9 9 9	4	1, 0 0 0
福岡市立少年科学会館	3, 0 2 0	3	1, 0 0 7
日本大学文理学部	3 5, 0 0 0	1 7	2, 0 5 9
幕張メッセホール	1 1, 5 5 8	2	5, 7 7 9
合 計・平 均	2 5 7, 4 5 2	2 0 2	1, 2 7 4

「資料は国土地理院ホームページから」

全国の入場者二十五万七千名に一日平均1274人。昨年暮れの釧路新聞では「04年読者が選ぶ根釧10大ニュース」で「伊能展の入場者二万人突破」が、「知床の自然遺産推薦」と並んで明るい話題として読者に選ばれました。

「伊能大図九州フロア展」を終えて 石川 清一

昨秋2004年11月26日から28日迄、福岡市立少年科学文化会館で開催した九州展は三日間で3020名の入場者があり盛会裡に終わることが出来ました。国土地理院さんの総力をあげたご支援と、関係各団体のご協力に御礼申し上げます。



西日本新聞 2004年11月24日

実行委員会の発足

03年9月地理院九州地方測量部根本部長の肝煎りでフロア展九州地方実行委員会が発足。

(地理院九州地方測量部、伊能忠敬研究会九州支部、日本測量協会九州支部、全測連九州地区協議会、福岡県測量設計業協会、福岡県土地家屋調査士会、福岡県ウオーキング協会の7団体で構成)

02年に中央で「アメリカ伊能大図里帰り展実行委員会」が発足後、程なくして事務局長の渡辺代表理事から構想を伺う機会があり、その

折「九州でもやれるといふね」とお話しを頂いたのが、私が係わりを持つことになったキッカケでした。実行委員会が出来、やっとこゝまでこれたかと、ホッとした思いでした。

会場さがし

当初簡単に考えていたが、人口140万人の福岡市でも意外に適当な会場が見当らずこれほど難行するとは予想外であった。第一候補の九電記念体育館がスポーツ振興以外の使用は不可との事でアツケなく駄目になったのがつまづきの初めで、次々と数ヶ所当たったがスペース、使用料等々こちら側の条件と合わず一ヶ月余決らずだいがあせった。この間福岡ドーム球場(ダイエーホークスの本拠地)福岡国際センター(大相撲九州場所の会場)の話も持込まれたが、使用料一日〇百万ではとても無理、論外。いろいろ物色している中で福岡市中心部に立地し、市の後援も得られる福岡市立少年科学文化会館が浮上、スペースに難点あるもこちらに決定し、本部に報告を行い、先ずは一安心した。

準備関係

04年6月の実行委員会で地理院や各主催団体の人事異動をうけて役員変更の必要が生じる中で、固辞するも諸般の事情で小生が実行委員長に就任する事になった。昨年私にとってサブライズの大は(比べるのは全く適当ではないが)私が長年勤めた安田火災海上(現損保ジャパン)から村瀬氏が社会保険庁長官になったこと。小は、小生がこの実行委員長になったことで正にサブライズで驚天動地の出来事でした。

4月、全国のトップをきって開催の神戸展の視察を行い、他にも九州に近い先行開催地の視察を8月松山展、10月広島展と行った。又、

他開催地の展示スペース、搬入作業等の情報も九州地方測量部（以下地測と略称）で情報を収集して頂き大変参考になった。

9月に入る頃から少しずつプレッシャーが高まる中で、折々地測を訪問、準備等打合せの中で小原部長、宮崎次長の力強い言葉に勇気づけられた。進捗状況は適宜幹事会を開きチェックを行った。

広報

10月中旬にポスター、チラシが出来上り主催各団体に配布。別途小中学校、市民センター等にも配布。現物を手にして中々立派。だんだん福岡展が近づいてきた実感がわいてきた。早速九州支部全員に送り再度期間中の協力をお願いした。

11月上旬「福岡市政だより」に掲載。（市政だよりは各家庭に配られる）11月中旬、地測から庁舎内記者クラブで各報道機関に九州フロア展の概要を発表。11月24日（開催前々日）地元西日本新聞夕刊に大図がカラー入りで大きく紹介される。

開催日及び前後

11月24日（前々日）、地測により会場一階フロアの大図の設置目標の計測を実施。大きな柱二本の間に九州全図がピタッとおさまるよう念入りにポイントを決めた。

11月25日（前日）午後各団体スタッフが会場に集合、地測宮崎次長総指揮の下、一階地測佐藤課長、三階安達課長を責任者に3時から展示品をトラックから会場へ搬入を始め、5時頃にはかなり出来上ったのにはビックリした。夜の10時過ぎまでかゝるかもしれないと心配していたが、さすが地理院さんの専門家集団、綿密な準備と無駄のない作業でお見事の一言につきる。

夕刻までに中央からの来賓、本部実行委員の渡辺さん（代表理事）星埜さん（日本地図センター専務理事）が順次福岡入りされ（国土地理院長さんも別途到着）いよいよ明日に迫った事を実感した。その夜は星埜、渡辺両先生と地測、九州支部有志で夕食をこ一緒し最新のお話など伺い大いに話がはずんだ。

11月26日（開催日・初日）いよいよ開催当日を迎え早朝から関係者一同参集し、しばし緊張のひととき。8時40分オープニング式典開始。実行委員長挨拶、渡辺国土地理院長、星埜、渡辺両本部実行委員の来賓お三方からの暖かい祝辞の後、恒例のテープカットを行い定刻の9時、予定通り開会の運びとなった。早速会場内のフロアに敷かれた大図の上でRKB毎日放送、NHK、西日本新聞等の取材をうけ、小生、地測小原部長、渡辺代表理事が各メディアに対応した。即日報道されフロア展





写真は会場風景

のPRに大いに役立った。

会場は多少狭いも入場者はフロア一杯に敷かれた九州全部の地図の大きさに先ずビックリ。さっそく関心のある場所に行き、のぞきこむ人だかりがあちこちに出来た。地図の上を歩いて観れるという今までにないスタイルと、何よりも最新の現代地図と変らない200年前の伊能測量の正確さに、会場のいたる所で感嘆の声が絶えなかった。子供連れの親子も多く意外だった。子供の頃から地図に親しめば将来地図ファン、伊能ファンになる期待大。

会期中に行った盛り上げ行事としては、地測による紀伊国屋版「伊能忠敬」のビデオ上映、ウオーキング協会によるJR博多駅から会場迄10kmの「ウオーキング大会」、県測協の「歩測体験コーナー」を行った。いずれもなかなかの盛況で、入場者アップにつながった。

会場内では九州支部諸兄も連日主催団体の一員として揃いのスタッフフジヤンパーを着用し、会場管理、案内係の役で入場者からの質問等に対応した。又、前日の搬入作業、終了後の撤収作業にも協力頂いた。お名前をあげて御礼とさせて頂きます。

野田茂生、中富道利、井上辰男、河島悦子、村井純孝、熊谷要平、原口光和、山下浩司、松尾卓次、松尾紀成の各氏。

又所用で参加出来なかった方からもたくさん激励を頂戴した。九州支部としても今回の大きな行事に他の団体に互して協力出来たのは「伊能忠敬研究会」の存在を示せて良かったと思います。

諸兄のご協力に感謝いたします。又計画段階から激励し、種々ご教示下さった渡辺代表理事に心から御礼申し上げます。

入場者数は初日490人台で出足が今一歩だったが、二日目以降は⑩⑨でもあり、又、マスコミ報道も効果があり、連日優に千人を超える人が入り、最終三日目は午後1時から3時頃の間はフロアが人で埋まり、イモ洗い(失礼)のごとき感を呈した。5時閉展し、地測小原部長から全スタッフを前に、入場者数は目標を突破する3020人に達した旨発表があり、一同拍手で締め、疲れも吹っ飛ばす思いであった。本当にありがとうございました。

(いしかわ せいいち

九州支部長、伊能大図フロア展九州地方実行委員長)

伊能大図「フロア展新潟」報告 垣見 壮一

平成16年11月19～23日の4日間（22日休館日）『伊能大図「フロア展」新潟』が「新潟県立自然科学館」（新潟市）で催された。

佐渡から越後・江戸までの伊能大図14面のささやかな展示ではあったが、勤労感謝の日を含めた休日と好天に恵まれ、有料にも関わらず約四千人が感嘆の声を上げ伊能大図の上を辿った。

今回幸運にも、新潟開催の指名をいただき、第三次、四次の佐渡越後測量二百年を記念して、伊能測量隊の里帰りと呼びかけられていたが、7月13日の水害、10月23日の中越地震と、うち続く大災害期か、中止まで検討され派手な宣伝等は避け慎ましやかな開催でということになった。

実行委員会には災害復旧業務に関わる測量、設計関係者も多く、一時はどうなることかと心配しただけに、多くの入場者や歩測競技に歓声を上げる子供達の姿に、胸が熱くなる思いでした。

災害報道で多忙なマスコミ各社も伊能大図「フロア展」を記事、放送として取り上げていただいたことと、測量設計業協会・土地家屋調査士の宣伝活動と自然科学館・歴史博物館の熱心な指導の結果と開催成功に感謝しています。

伊能大図全国レプリカ完成により、今後地方にても新潟展のような小規模の展示会も多くなると思われますので、参考のため打合せも含めた経過を報告します。

開催までの経緯

平成16年1月6日 国土地理院北陸地方測量部木佐貫次長から伊能

大図「フロア展新潟」の開催について協力依頼の連絡があり、研究会新潟支部会員に通知全面協力を了承する。

1月23日 第一回打合 新潟市市役所分館会議室
木佐貫次長から次の項目について説明があった。

- 一、開催の趣旨
- 二、展示の概要
- 三、開催の時期、場所
- 四、実行委員会の構成
- 五、経費

会議経過

伊能大図「フロア展」開催の目的、実施方針、開催の時期と場所、実施体制、展示内容、開催までのスケジュール等が協議された。

本会議で実行委員会についての規約（案）が承認され、委員長の選出、委員会を補佐する幹事会の構成、運営の要となる事務局設置等は次回会議の議題とする。

出席団体

国土地理院北陸地方測量部 新潟県測量設計業協会
新潟県土地家屋調査士会 新潟日報社 日本測量協会北陸支部
新潟市国際文化部 新潟市歴史博物館 伊能忠敬研究会新潟支部

3月18日 第二回打合 新潟県立自然科学館会議室

木佐貫次長から会場、開催日の決定説明があった。

一、開催日・期間 前記

二、会場 「新潟県立自然科学館」（新潟市）

会議経過

展示会名称については、レプリカであることと展示範囲が部分的なことから『伊能大図「フロア展」新潟』とする。

実行委員メンバー

委員長に小林一三

伊能忠敬研究会新潟支部長を選出

国土地理院北陸地方測量部長

新潟県立自然科学館長

日本測量協会北陸支部長

新潟県測量設計業協会長

新潟県土地家屋調査士会長

幹事会

右の六団体と新潟日報で構成

指導協力 新潟県立歴史博物館

後援会

国土交通省北陸地方整備局 新潟市教育委員会 新潟日報社

NHK新潟放送局 新潟工科専門学校 新潟県土木史研究会新潟

応用地質研究会 にいがた地域創造センター

宣伝の取組み

一、宣伝用配布物

・ポスター(A1) 200枚

・チラシ(A4) 3000枚

二、マスコミ関係

・11月11日 新潟県政記者クラブ

・11月12日 新潟県新政記者クラブ資料配付

・11月15日 ケーブルネット新潟テロップ



三条新聞 11月17日

- ・11月19日 ケーブルネット新潟開会式放映
- ・11月20日 新潟日報朝刊掲載
- ・11月22日 新潟放送(BSN) 渡辺代表取材放映

4月22日 第一回幹事会 新潟県立自然科学館会議室

会場視察展示物配置のアウトライン、費用負担の了承等

9月9日 第三回打合 新潟県立自然科学館会議室

最終企画打合せ。

開催概要

開会宣言 11月19日9時30分 小林実行委員長

テープカット

小林実行委員長 国土地理院地理情報部長

新潟県立自然科学館長 日本測量協会北陸支部事務局長

新潟県測量設計業協会長 新潟県土地家屋調査士会長

展示概要

一、伊能大図(佐渡・越後・江戸) 14面

二、伊能大図(海洋情報部) 4面

三、伊能小図(全国) 3面

四、伊能測量器具(レプリカ) 8点

五、現代測量機器(展示、実演、体験コーナー)

六、中越地震関係(被害状況航空写真、地図)

七、江戸時代絵図(伊能図前後の絵図、世界図、越後絵図)

行事

一、講演会「伊能図発見物語」 講師 渡辺代表理事

二、歩測体験テスト

三、土地家屋調査士会による無料相談

経費収支

収入 45万円「協賛金」

新潟県測量設計業協会

新潟県土地家屋調査士会

日本測量協会北陸支部

支出 30万円「フロア展」全国共通経費負担金

展示物運搬費・ポスター・パネル

資料・機材費

52500円「養生費」押し入れ産業

97500円「諸経費」手数料・事務用品

その他 会場費無料（展示・式典小道具・看板等借用）

展示・撤去・会場管理 指揮田中専門職（国土地理院・北陸）

協力 会員 ボランティア 約20人／日

歩測競技 測量設計業協会約10人／日

特別指導 自然科学館主任 歴史博物館課長

入館料 「新潟県立自然科学館」

大人550円 小中学生100円

期間入館者数

・19日（金） 598人

・20日（土） 712人

・21日（日） 1406人

・23日（火・祝） 1283人

合計 3999人

エピソード

一、歩測コンテスト

1920日の二日間、先着50名

季節（新潟は寒い）を考慮して室内に70位のコースを設定、子供を主に呼びかけた。

養護学校の団体があり、引率教師と相談したところ10名位は参加可能とのこと。子供たちの楽しさに競技も盛り上がる。この中から驚くべき精度で一位入賞、はにかむ彼がみんなに励まされ、緊張した面持ちで表彰を受けたときは万雷の拍手。

「この子の最良の日です。親がどんなに喜ぶことか」この先生の言葉に歩測設営の測量設計業協会幹事「これで歩測競技の苦勞が報われました」と大感激。一同この子たちの将来の幸福を心から祈る。終了後歩測競技は会場が狭くとも、車椅子、高齢者でも可能と話し合う。

二、講演会 講師 渡辺代表理事

21日聴講者約100人女性も多く講師の情熱を込めた話に熱心にメモをとる人、頷く人も多く好評。終了後改めて話しかけてくる人も多かった。真面目な題名なので地方ではと心配したが満席と真面目な聴講に、新潟もまんざらでもないと思わず「にんまり」する。

三、会場にて

①新聞で知ったと三条市の稲越氏が真鍮製の小方儀を持参、渡辺代表から「江戸後期の村の絵図、農地の測量等に地主などかなりの人に使用された物だろう」と使用方法の説明を受け感謝される。

②特製の伊能大図縮尺に合わせたスケールとルーペは好評。

③中越地震の航空写真とその図化、時間的変化図は多くの人の足を止めた。北陸地方測量部のアイデア。(中越地震余話Ⅱ地震被災地の道路は寸断され、倒壊家屋、土砂崩落がいたるところにあり。上空を自衛隊のヘリ、地上には緊急車両、建設関係重機の赤色、黄色ランプが点滅、戦場はこの様なものかと思いました。各家庭、車庫等に赤(危険)黄色(注意)の張り紙が不気味でした)

④渡辺代表は講演、テレビ取材等多忙の中、会場にて種々解説、時には小学生と熱心に話す微笑ましい場面があり、メモをとるこの子は将来の「伊能忠敬」研究者か。

⑤女子大生数名が卒業論文にすること、鋭くも嬉しい質問の攻撃。若者の姿も多く頼もしいことだった。

国土地理院北陸地方測量部を中心に測量協会、測量設計業協会、土地家屋調査士会の献身的な頑張り。自然科学館、歴史博物館の心暖かいご指導、伊能研究会新潟支部(小林一三、山岸俊男、石橋輝樹、石川進、熊倉健、山浦佐智代のみなさんに垣見)も我がこととしての協力がああり、心に残る『伊能大図「フロア展」新潟』となりました。災害による交通不便にもかかわらず情熱を込めた講演で多くの聴衆に感銘与えた渡辺代表に感謝の意を表します。

(かきみ そーいち・新潟支部事務局長)

写真説明

□開会式、中央小林支部長

□「フロア展会場」

□三条から持参の「小方儀」

□渡辺代表に取材中の小学生



いのうただのり
伊能忠誨日記

(八) 最終回

佐久間 達夫

文政六癸未年(一八二三) 伊能忠誨一八才

五月 小

一〇日 早朝、喜八を横川岸へ遣す。七左衛門小堤行きの供。高浜、おクニ母入来。泊る。

十一日 永沢半十郎入来。同人に呼ばれ昼飯。予久兵衛を連れて半十郎宅へ行く。酒飯出て囲碁、暮頃帰宅。暮頃おクニ、リキ、其外呼ばれ半十郎宅へ行く。種々馳走になり九時頃帰る。昼後、七左衛門小堤より帰る。加納屋帰る。イク女帰る。神保氏、殿様此度西之丸五人切之外手オイの内に御座候間、出府に付不_レ来由。

一四日 帯刀来たる。おクニ里開き(里帰り)。神保氏不_レ来故、予不_レ行積もりの処、永沢半右衛門、横川岸へ来たり。

二三日 八半時過、永沢半右衛門、高浜の母送りおクニ帰り来たる。酒飯を出す。金田平左衛門来たる。親類一同、及びよんどころなき出入りの者へ赤飯を遣す。天口関場の願、新五郎来たる、泊る。

六月 小

朔日 今夕測量。手伝い人、観星鏡附線、紙屋新五郎。望遠鏡、大川治兵衛、平右衛門。垂揺球儀、忠吉、吉兵衛。象限儀、七

左衛門、茂兵衛。地平圭儀、永沢治郎右衛門、久兵衛。小田采女来たる。菱屋、宮崎等見物に来たる。今夜、皆々手伝いへ酒飯を出す。おコマ手伝いに来たる。今夜、加納屋帰る。食測、細測記相認め、御用状相付、駿河屋へ渡す。今夜、おコマ帰る。

二日 今日、御浜堂故、役人町代等来たる。中食、無_レ酒すみ皆々帰る。八時過人來たり、只今天王様御立の由。久兵衛を名代に天王様へ遣す。新井宿迄行き、其所より千代松を知らせに帰す。予、治郎右衛門同道、仲町へ行き御輿に逢い、橋本へ行き役人等と共に柏屋にて神酒を頂戴。御飯屋へ御輿治まり帰宅。

二日 予四時頃、上下にて山川へ行く。役人等来たり居る。御神酒頂戴。御輿の御供して上寺宿より下寺宿、浜宿、川岸、又、浜宿の永沢にて皆々昼食(当日祇園堂)。それより治郎右衛門御供に出る。上寺宿より田宿、橋本、予は此所にて帰宅。名代に久兵衛を遣す。同人、荒久、新井宿等御供し、夜六時過帰宅。浜宿へ治まり人参り候共、天王様御在の由。

二日 今夕、川口のソノ女の実家、諸道具等片付ける。其故は、水満々と溢れ来たるが故也。故に飯を遣す。今夜、本宿川岸へ水着き候故、店子より防ぎの土俵を貰い来たる。久兵衛を遣す。七左衛門来たる。

二四日 予、七左衛門同道、本新(本宿・新宿)両沸岸見分に行く。如_二前夜_一、むすびを遣す。

七月 大

八日 文庫蔵土用洗。桶屋リキ、ソノ、サン、チヨ、久兵衛妻来

たる。膳碗洗う。

九日 桶屋リキ、ソノ、チヨ、久兵衛妻等来たり、膳碗洗う。駿河

屋へ謎えし、矢三たち来たる。

一〇日 長持、其外書物等、文庫蔵へ入れる。

二二日 永沢仁兵衛来たる。組金を貸し遣す。暮れて間もなく今夜、

予、おクニ同道、観福寺、及び浄国寺へ行く。今夜店賃寄る故夜明かし。

一六日 星頃、七左衛門、斎藤東次郎来たり、弓を引く。九時過、予、

名左衛門、平右衛門、リキ、ソノ、サン、コマ等、船にて利根迄出る。お船(真菰の舟)を流し帰宅。

八月 小

二三日 曾祖母(民)五十年忌(一)取越に付、浄国寺上人入来。相伴へ

永沢治郎右衛門、同仁兵衛、伊能七左衛門を呼び入来たる。法事相済み飯を出す。九ツ時頃仁兵衛、浄国寺帰る。働きの

者、及び家内の者へ飯を出す。予、久兵衛、浄国寺墓参。

二四日 伯母(妙薫)一周忌。観福寺入来。相伴人、永沢治郎右衛門

伊能七左衛門来たり飯を出す。八時頃観福寺帰る。予、治郎右衛門、九兵衛同道、観福寺へ墓参。天満屋長兵衛、ソノ女

等、其外働きの者来たる。

二六日 久兵衛を太田(村)加瀬(三)に遣す。松田の養子を聞きに。

九月 大

一〇日 伊能七左衛門来たる。八時頃乗船。予、佐右衛門、喜八也。

(忠誨江戸へ登り、天文御用所へ出勤。忠誨の身分は、

「御書物奉行、天文方兼、高橋作左衛門手付」)

十一月 大

朔日 四時過浅草出立。山田御役所へ行き、御扶持手形請取る。

二日 朝七時乗船。五半時行徳着。四時頃八幡着。九時頃金ヶ谷着。

三日 朝五時頃佐原帰宅。治郎右衛門、七左衛門、其外来たる。所々少し宛土産を遣す。

二九日 橋替ババ来たる。泊まる(十二月朔日帰る)。

十二月 大

九日 今晚より彗星測量。

一三日 すすはき。彗星見留候書状、江戸へ遣す。

一六日 今夜、七左衛門、治郎右衛門、平右衛門、治兵衛、源藏等食測手伝い。尤、復四前より見える。暮れより酒飯を出す。

一八日 今昼、加納屋治兵衛江戸出立。尤、御用状、彗星測稿持参。地図請取。

二七日 今晚七時、加納屋治兵衛地図持参帰り来たる。七左衛門来たる。今晚、荒北より帰り候由。今朝より昼過ぎ迄餅を搗く。

延寿寺並びに持宝院、清浄院来たり、正月のはらいを作る。今夜永沢仁兵衛へ行く。定例の通り「水帳」引渡し、酒飯出

る。油屋、鍵屋、伊藤、石屋、永藤、五郎兵衛、嶋屋等也。

四時頃帰宅。今夕、加納屋津ノ宮へ帰る。帯刀来たる。

二九日 横川岸(七左衛門)、中宿(平右衛門)、津ノ宮へ歳暮を遣す。

文政七甲申年(一八二四)伊能忠誨一九才

正月 大

(昨年の通り、村役人等の忠誨宅へ年始、忠誨より親族への門礼、天王様参詣、観福寺への年始。観福寺、並びに諸寺僧侶の目待祈禱、大般若經の転読等記述あるが省略する)

一日 おクニ、観福寺、浄国寺、永沢仁兵衛、永沢半十郎、永沢半右衛門へ年始に行く。橋替ババ来たる。

二月 大

朔日 七左衛門来たる。庭測量。

二日 七左衛門来たる。庭測量。

三日 裏畑測量。

六日 居屋敷、庭地図成る。

八日 治兵衛母来たる。予、七左衛門へ行き、居屋敷測量。

三月 小

五日 今暮、斉藤吉衛門来たる。付持才兵衛、江戸より来たる云う。

神保忠右衛門、江戸にて二日夜、死去の由。依^レ之、横川岸、中宿へ人を遣し相談。七左衛門同道明日出立に相成り支度。

七左衛門来たり泊る。

六日 予、七左衛門同道、久兵衛、忠吉、サムライ政吉、横宿喜八、

草履取千代松、由兵衛息清藏、近所総代等、馬乗り共々十人出立。八時過白曇になる。七時頃多古偏田屋着。暮六時、小堤、神保庄作方へ着。時に葬儀し故に間に不^レ合。直ちに神保忠右衛門宅へ行く。永沢半右衛門来たり居る。泊る。今朝、平右衛門来たる。

七日 予、七左衛門、サムライ政吉、槍持喜八、草履取千代松、挟箱万兵衛、安川、七左衛門従兄弟川村八太夫、庄作等にて仏

参。帰りに庄作宅へ寄り、暇乞い致し、忠右衛門宅へ帰り朝飯すみ致度四時過皆々出立。九時過、多古偏田屋着。暮六時帰宅。加納屋来たり居る。入湯後、七左衛門帰る。

十五日 九時頃、久兵衛代参して伊勢へ出立。尤、町内の参会^ミ鑑に、去年当たり延び引きいたし候。三郎兵衛同道也。

四月 小

二二日 祖父、祖母、母、鉄之助、年廻追善⁽³⁾。七左衛門来たる。平右衛門来たる。観福寺入来。延寿寺来たる。法事すみ飯すみ九時頃帰る。

五月 大

五日 親類等節句に来たる。予、床上げ(麻疹請け臥していた)。伊八来たる。今夜、永沢治郎右衛門、七左衛門来たる。

六月 小

朔日 伊能七左衛門、治兵衛、茂兵衛等来たり、食測手伝う。尤、量間にて、復円前より測量す。加納屋治兵衛帰る。茂兵衛帰る。

三日 食測書状を忠七に遣し、江戸登る也。

一〇日 天王様御浜下り。柏屋にて御神酒の節、人来たる。伊八を名代に遣す。加納屋来る(十一日、十二日とも天王様祭礼記述)。

二四日 治兵衛妻チセ来たる。土用着物干し手伝い帰る。書物、土用干し⁽⁴⁾初める。

七月 小

九 日 七左衛門來たる。今朝、久兵衛、蔵の清蔵帰宅。又、文庫蔵

二階掃除。

一〇日 今夕より久兵衛來たり居る。本箱、夜具蒲団、土用干しすみ。

文庫箱二階へあげる。かけ物干す。

二〇日 先祖長持土用干し。

二三日 膳碗洗い仕置す。チヨ、コマ、久兵衛妻手伝う。今朝未明、

垂球為_レ持、加納屋遣す也。尤、先目より止み候故、弥三郎

直しに遣し加納屋出立。一日延引の由。

二七日 大小(刀)干す。七左衛門來たりふく。

二九日 予、土手へ行く。尤、久兵衛連れ。中宿書狀にて蕎麦壺そう

貰いに來たる。遣す。今夜、新宿淵岸土手切れる。

八月 大

朔 日 佐右衛門土手へ行く。今夜本家、淵岸、橋本町内へむすび三

升遣す。

四 日 長嶋嘉兵衛來たる。昼飯すみ。佐右衛門、嘉兵衛、良助連れ、

予、新田土手見廻る。八時過帰亭新田土手、即ち南和田へむ

すびにて五斗、十四ヶ村人足へ遣す。

五 日 今朝、田宿へ水死人流れ付く。

一〇日 控えの星図出来。尤、方図。

一七日 長えんま、本宿淵岸、水、道こして切れ候由。中宿來たり云

う。七左衛門來たる。

一九日 佐石衛門を以て、新田二十軒水見舞。たきぎ三把宛、荒川茂

兵衛而已六把。前ノ川道のすり払い行なう由。前申年の水に

少し劣る由、皆云う。

二〇日 作男治兵衛を以て、川岸水見舞、たきぎ廻す。尤、店子而已

は今朝五寸ばかり引く。

一四日 昨朝、加納屋、江戸より帰宅の由。尤、十三日出府にて垂球

(垂揺球儀)不_レ残持参。

壬八月 小

八 日 味噌豆四俵搗く。但し、麦四斗也。壺俵塩貳升、麴四斗也。

九月 大

六 日 加納屋、喜重郎來たる。周蔵(秀蔵)、神保玄次郎と改名(5)。

当地へ下り、スマコ(角古)に宿取候由。永沢仁兵衛來る云

う。私方へ來たり候故、スマコへ宿取遣し候由。尤、足痛の

由。七左衛門來たる。平右衛門來る。

九 日 永沢仁兵衛來たる。平右衛門來る。七左衛門來る。玄次郎一

件相談。

一〇日 今朝、平右衛門、玄次郎方へ行き話し合う。相對申出、金五

両遣し候。尤、内実は内より出る。其趣にて相済み、明日出

立の積り由。

十月 小

一〇日 平右衛門來たる。加納屋來たる。今日出府の由。時に下河辺

より伊豆七嶋島々より着分候嶋図、井、書上帳等、不_レ残入

用の由、申來り候故、右同人に為_レ持、遣す。

十一月 大

二五日 加納屋治兵衛母來たり泊る。八時過金星測量。七左衛門來た

る。

二七日 石屋三郎兵衛来たる。象限儀立替。

十二月 大

一四日 久兵衛出府、箔屋町普請見聞の上、大工渡し金、其外家主方の掛合に付上がる。

文政八乙酉年(一八二五)伊能忠誨二〇才

正月 大

(昨年通り年始、門札、社寺等への挨拶、参詣等記述あるが省略する)

一三日 佐原出立江戸へ登る。神田御屋敷(佐原村領主の江戸屋敷)

や天文方御役所などへ年札に行く。

二二日 予、渋川侯、及び三宅、榎本(箱田左太夫)へ行く。尤、渋

川は袴羽織にて行く。未だ帰宅無_レ之候に付、為_二祝儀_一、松魚併に一連持参。代金二朱。各々酒肴、蕎麦等出て候。渋川

侯へ為_二御肴代金_一二朱上げる。三宅は小半紙十帖遣す。

二月 小

八日 予出勤。七時過、予榎本同道、口山町へ行く。帰宅囲碁。五

ツ時頃榎本帰る。星図星形座線出来る。

二三日 予出勤。星両図、座録、宿録等皆出来る。但し書入ればかり残る。右は重太郎に頼む。

四月 小

二〇日 予、江戸浅草出立、佐原へ下る。(二二日佐原宅帰着)。

五月 大

五日 朝菖蒲湯。小川屋喜久兵衛、柏木音右衛門等三十三名祝儀に来たる。

二五日 橋替のババ来たる。泊る。

二六日 津ノ宮のおチセ来たる。油屋定八、七左衛門来る。橋替ババ帰る。

六月 小

七日 七左衛門来たる。父十三年、研忍(六代景利)の百年(6)に付、

四時前観福寺入来たる。円藏院、延寿寺、持宝院来たる。粥を出し、御経後御膳を出す。相伴は永沢治郎右衛門、同仁兵衛、七左衛門、平右衛門、予等也。飯のうえ酒を出す。九時過皆々帰る。八時頃永沢仁兵衛帰る。七時過、予、久兵衛、忠吉、半兵衛、喜八、良助連れ仏参。

(一〇日より十二日まで、天王様「八坂神社」の祭礼の記述あるが省略)

一七日 御用蔵、長持、土用干し。

一八日 先祖長持土用干し。

二〇日 鍬木の幸十郎来たる。尤、土用干しに付、画図見物致し度由。

二二日 ソノ女、コマ女、久兵衛妻来たる。文庫蔵の膳碗洗い、文庫蔵本箱、土用干し初める。ソノ、コマ泊る。

二三日 膳碗洗い(二四日も膳碗洗い)。

七月 大

朔日 予、津ノ宮加納屋へ行き、中食いたし、昼後先生(久保木)へ行く。論語、並び世説講釈_二を聞き、又、加納屋へ帰り直

ちに帰宅。

九日 佐右衛門帰り来たる。書物目録と相合せ、箱に入れ終わる。

八月 小

五日 地図中図、小図、江戸図、土用干し。永沢治郎右衛門、伊能平右衛門、林七右衛門、仁井宿久右衛門等、画図見に来たる。追而、所々より見に来たる。

一〇日 大画図土用干し。文助来たる。泊る。長嶋の嘉兵衛来たる。

一三日 予、久兵衛、半兵衛、喜八、佐原出立江戸へ登る。桑原宅、浅草御役所へ行き、八月二七日に、桑原養純、同秋庵、岩次郎同道にて佐原へ帰る。

九月 小

朔日 今朝、桑原兄弟、永沢半十郎へ行く。尤、加瀬は工藤の縁家故、今度丁子（銚子）より廻り候積もりの所故、先、加瀬の母に近づくに相成る。同人、今日帰る由。五半時過、桑原兄弟、船にて出立、鹿島、丁子へ行く。

五日 七時過、桑原兄弟、丁子より太田へ廻り、昨夜、加瀬佐兵衛方へ泊り、馬にて来たる。

六日 四時過、桑原兄弟出立。成田通りにて江戸へ帰る。尤、滑川迄馬一疋頼み送り遣す。

十月 大

一六日 今夜七左衛門来たる。治郎右衛門、平左衛門来たる。水島原の源蔵来たる。九時過月食測量。

一九日 今日、帯刀出府の由故、食測書状、横川岸へ頼み遣す。

二五日 橋替ババ来たる。泊る。（二七日橋替ババ帰る）。

十一月 小

七日 佐野屋長作（8）来たる。天文台へ自然に（長芋か）四株生ず。今夜二株風味祝う。尤、三本は大株也。

文政九丙戌年（一八二六）伊能忠誨二二才

正月 大

（正月の記述内容は例年通りにつき省略する）

二〇日 予、治兵衛、久兵衛、桑原へ行く。是迄日本橋住居の所、当月十日より木挽町式丁目住居に成る。喜八を休息所へ遣し掃除。

三月 大

五日 予、高橋侯へ行く。折れ目鏡を作り、此度食測に用い候様被仰。今夜、御役所へ行く。

六月 大

六日 七半時過、女子出生の由（長女テイ）（9）。永沢半右衛門より有ニ沙汰。永沢治郎右衛門妻祝儀来たる。ミツを新店へ遣す。ソノ来たる。桶屋リキ、同母来たる。

八日 桶屋リキ、ソノ、チヨ、フク来たる。おはぎを親類、町内、顔定出入りの者へ遣す。

一二日 祇園堂に相当り、例年通り御膳を出す。人数上下合二十八人

也。ソノ来たる。手伝う。橋替ババ来たる（十三日帰る）。

二六日 産屋明きに付、桶屋リキ、久兵衛、文太郎、新店へ行き、お
テイ、ミツ同道天王参詣。氏神へ参詣に来たる。

七月 小

五日、忠誨は、源空寺、浅草観音へ女子出生報告、参詣の
ため江戸へ登り、十三日に佐原へ帰宅。

二五日 今晚八ツ半過おテイ（忠誨の長女）大病に付、予、新店へ行
き、明六時帰り来たる。

二六日 予、忠吉、小太郎を連れ、津ノ宮へ行く。定八来る。おテイ
死去（9）の由故、直ちに帰宅。加納屋治兵衛同道帰宅。伊能七
左衛門、同平右衛門、同八郎兵衛、同八之丞、同七郎右衛門
来たり居る。ソノ、チヨ、コマ、久兵衛妻、三右衛門後家、
桶屋リキ等手伝いに来る。今夕延寿寺来る。治郎右衛門妻、
七左衛門母来る。半右衛門来る。六半時過葬送の送り。八時、
過おテイ病家より私が駕にて引取る。おクニ帰り来る。伊能
七左衛門、同平右衛門、同八郎兵衛、同八之丞、同七郎右衛
門、永沢治助、同三蔵、同半蔵、同源次郎、同幸右衛門、永
沢半十郎、田宿町内、加納屋治兵衛、久兵衛、リキ、ミツ、
チエ、乳母、関戸の乳母、エツ、コマ、ソノ、久兵衛妻、桶
屋リキ等なり。茂左衛門後家、おスマ同道悔やみに来る。

忠誨の日記は、この後九月六日迄記述してあるが、心成しか文字も
乱れ、忠誨の胸の中が推察される。忠誨は、愛娘「貞」の後を追うよ
うに翌年（文政十年）二月二一日、二二歳で死去。

注 釈

注1 曾祖母（民）の五十年忌

伊能家九代長由の妻「民」は、南中村（現千葉県多古町南中）の
平山藤右衛門秀暁の娘で、享保八年（一七二三）出生。寛保元年
の十九歳のとき、後に忠敬の妻となる「達」を出生。翌年夫に先
立たれ、以後、達の養育と家業に励む。生家が日蓮宗であつたの
で、生涯日蓮宗を信じ、墓地も伊能家の塋域ではなく、佐原市寺
宿の浄国寺（日蓮宗）の永沢治郎右衛門家の墓域内にとる。安永
三年十一月二三日、五二歳没。戒名は「浄心院日昌大姉」。

注2 太田村の加瀬

太田村の加瀬とは、現在の千葉県旭市太田の加瀬家で、忠敬の二
女「篠」の嫁ぎ先である。篠は明和六年（一七六九）出生、天明
八年二十歳で没。戒名は「種鏡院霜空妙融大姉」。

注3 祖父（忠敬）、祖母（達）、母（リテ）、鉄之助（忠誨の弟）の
年回追善供養

忠敬 文化一五年四月一三日 七四歳没

達 天明三年一二月二九日 四三歳没
戒名 有功院成裕種徳居士

リテ 文政元年六月一三日 三五歳没
戒名 研心院妙唱日鏡大姉

鉄之助 文政元年一二月二五日 九歳没
戒名 智学院玉如恵光童子

（完）

注4 土用干し

伊能家では、毎年、家族や奉公人などによって、文庫蔵の清掃や、地図、書物、衣類の土用干し、膳碗洗いなどを行ってきた。そのため、忠敬、忠誨、六代景利などの遺書遺品が現在迄保存されてきたのであろう。

注5 神保玄次郎敬慎（伊能秀蔵）

忠敬の二男で、第一次から六次（一五歳〜二四歳）まで、父に従って測量に参加する。文化一二年、素行が悪いとの理由で父忠敬より勘当される。文政七年九月六日、江戸より佐原へ下向し、「神保玄次郎敬慎」と改名したことを告げる。中里やすと結婚。墓地は、佐原市牧野の観福寺の伊能三郎右衛門家の墓地入口の石段を登った右側にある。天保九年一〇月二六日、五二歳没。戒名は、教業院能因道界信士。

注6 父（景敬）、研忍（六代景利）の年回

景敬 文化一〇年六月七日 四八歳没

戒名 秦鏡院裔誠道研居士

景利 享保一一年六月二七日 五九歳没

戒名 真言院如宝研忍居士

伊能景利は、五代景知の嫡子で、若くして名主をやり、国絵図の作成や川除普請などを行なう。又、佐原村と其の周辺諸村の覚え書である「部冊帳」、神祇、釈教、儒書、年中定書などを記録した「千代の古見知」「続千代の古見知」などを残した。

注7 久保木清淵より儒学を学んだ忠誨

伊能忠敬の儒学の師であった久保木清淵（一七六二〜一八二九）について、忠誨も論語などを学び始めたが、志なかばで死去。

注8 佐野屋長作

佐野屋は、忠敬家と同町内の本橋元の香取街道沿いに住居を構えていて、裏通りに伊能家と接していた。現在も伊能旧宅の隣接地にあり、姓は橋本という。

注9 伊能貞テイ

忠誨二一歳、「クニ」一八歳の時の子。文政九年七月二六日、一歳で没。戒名は発生院心如円月童女。クニは、忠誨没後、生家へ復籍し、土浦市大町の色川治兵衛と再婚し、明治二〇年六月二五日没。戒名は、南窓貞寿大師。



伊能忠敬旧宅(店舗)佐原市本橋本

佐久間さんの労作「伊能忠誨日記」が終了いたしました。忠誨はお役目や家のことを懸命に勤めていました。その上、暦や星学にも若者らしく鋭い関心を持ち勉学に励んだ模様がこの日記には表れていました。早世をたいへん残念に感じております。余命があれば大きな仕事が出来た器でしょうに。貴重な史料のご開示にこころ配りをいただきました佐久間さんに厚く御礼申し上げます。

編集部

伊能忠誨日記番外資料

伊能忠誨（忠敬の孫）宅への来訪者・訪問先

佐久間 達夫

「伊能忠誨日記」の連載は「ナンバー（八）」をもって終らせていただきます。十二歳頃の忠誨は、祖父忠敬にも手に余る子であった『伊能忠敬研究』第三十六号・待望の未公開忠敬書簡）ようであるが、「忠誨日記」では、伯母妙薫（忠敬の長女・稲）の指導がよかったためか、熱心に浅草の司天台に通い、高橋景保について天文暦学の道に励んだようである。

また忠敬死後は、佐原の家で親族の協力を得て天体観測の継続や村政にも参加し、伊能三郎右衛門家の存続に努力した。

しかし、病気には勝てず、二十二歳（暦年齢）の若さで天国に旅立たれてしまった。

忠誨の遺書、二十種二十九点は、忠敬の遺書遺品とともに、歴史資料として国の重要文化財に指定され、佐原市の伊能忠敬記念館に保管されている。

※ 注釈 伊能忠誨遺書

二十四節気	一冊	忠誨自筆日記	四冊	掌冊	三冊
草稿	一冊	暦法新書続録	一冊	暦法新書続録立成	一冊
下編図解	二冊	交食法	一冊	二法所用数	一冊
恒星測要	一冊	七曜法	一冊	刪補授時曆法	一冊
消長法	一冊	儀象考成	四冊	日本和蘭対朔曆法	一冊

推算法	一冊	暦注諸件例	一冊	暦引	一冊
日纏曆旨	一冊	新成恒星黄赤平行経緯度			一冊

次に伊能忠誨宅（江戸・佐原）への来訪者と、忠誨の訪問先について記してみたい。

一、伊能家と親族

※年齢は暦年齢

・伊能忠誨 伊能忠敬の長男景敬・リテの長男

文政一〇年二月二一日、二二歳没 戒名 修学院麗薬成徳居士

・伊能クニ 忠誨の妻。常陸国新治郡高浜村（現茨城県石岡市高浜）

笹目八郎兵衛（現篠目姓）の二女。文化六年一〇月一二日生まれ、文政六年四月二六日、一五歳のとき、忠誨と結納をかわし、

文政九年六月六日に、長女「テイ」を出産する。「テイ」は、同年七月二六日早死、法名 法性院心如円月童女（墓石は発生院と刻字）。

「クニ」は、夫・忠誨が没したので、生家へ復籍する。その後、土浦市大町の色川治兵衛と再婚し、明治二〇年六月二五日に没する。法名は南窓貞寿大姉といい、菩提寺は神童寺

・伊能景利 伊能家六代目当主 享保一一年六月二七日 五九歳没

戒名 真言院如宝研忍居士

・伊能 民 忠誨の曾祖母 伊能家九代当主長由の妻 安永三年一一

月二三日 五二歳没 戒名 浄心院日昌大姉

・伊能 達 忠誨の祖母 伊能家一〇代当主忠敬の妻 天明三年二二月二九日 四三歳没 戒名 研心院妙唱日鏡大姉

・伊能景敬 忠誨の父 伊能家一代当主 文化一〇年六月七日

四八歳没 戒名 秦鏡庵齋誠道研居士

・伊能リテ 忠誨の母 伊能家一代当主景敬の妻 文政元年六月一

三日 三五歳没 戒名 鏡智院咬月亮貞大姉

・伊能鉄之助 忠誨の弟 文政元年一月二五日 九歳没

戒名 智学院玉如恵光童子

・伊能 稲(妙薫) 忠誨の叔母 忠敬の長女 文政五年八月二四日

六〇歳没 戒名 楞嚴院鉢常妙美大姉

・加瀬 篠(伊能篠) 忠誨の叔母 忠敬の二女 下総国匝瑳郡太田

村(現旭市太田)の加瀬稠卿(修助)に嫁ぐ。後、佐原へ帰り

天明八年一月九日(二十歳)で没

戒名 種鏡院霜空妙融大姉

・松田 琴 忠敬の三女竜龍ヶ崎村(現茨城県竜ヶ崎市)の松田丈右衛

門光遠に嫁ぐ。元治二年三月一七日 七七歳没

戒名 般山智舟大姉

・松田セオ 松田光遠・琴の娘か

・神保玄次郎敬慎(伊能秀蔵) 忠敬の二男 桜井八十右衛門に婿養子

に入る 離縁後中里ヤスと結婚 天保九年一〇月二六日

五三歳没 戒名 教業院能円道界信士

・神保忠右衛門信敬 忠敬の父貞恒の出生宅 上総国小堤村(現横芝

町小堤) 神保家九代当主 信敬は忠敬が命名

文政七年三月二日没

・神保庄作(延宣) 忠敬の兄・貞詮の子

・小川新兵衛 忠敬の長男・景敬の妻・リテの出生宅

上総国東土川村(現東金市宿)

・東土川の祖母 リテの母「武津」 文政四年一〇月一七日没

戒名 本具院妙性日道信女

・東土川の叔父 小川新兵衛家九代当主政義 天保一四年 六九歳没

戒名 以心院得入日了信士

・伊能七左衛門成美 伊能三郎右衛門家の親族 嘉永三年没

佐原村横川岸住

・伊能帯刀(伊能七左衛門) 佐原村横川岸住

・伊能平右衛門 伊能三郎右衛門家の親族 佐原村下宿住

現在諏訪神社宮司宅 娘ワカ ナツ

・伊能茂左衛門 伊能三郎右衛門家の親族 佐原村新橋本住

現伊能忠敬記念館敷地

・伊能スマ 茂左衛門の妻 上総国蓮沼村の土屋敬一の娘

・伊能八郎兵衛 伊能三郎右衛門家の分家 元治二年四月二九日没

佐原村寺宿住

・伊能八之丞 伊能八郎兵衛家 天保八年一月二二日没

・大須賀八郎右衛門伊八 八之丞の弟 伊能家の奉公人

文政八年三月二日 三〇歳没

・伊能七郎右衛門俊則 伊能三郎右衛門家の分家 忠敬が伊能家に婿

養子に入ったとき、後見人であった伊能豊秋の子孫

佐原村八日市場住

・伊能忠閏 伊能豊秋の長男 幼名勝次郎 俳号鳳後 茨城県潮来市

の長勝寺と佐原市の観福寺に弟子たちが建立した句碑がある。

□長勝寺に建立されている句碑

古乃者那也 曾毛加麻久良能 織乃銘 鳳後

(この花や そも鎌倉の 鐘の銘)

文化十一戌年仲冬 筆弟建

□観福寺に建立されている句碑

暖（ぬくもり）を ふり敷く物の おぼろ月

伊能式部 藤原鳳後

天保四年巳年二月 常陽潮来筆弟中建立

・伊能幸左衛門 伊能豊秋の二男 佐原村新地に分家 幸左衛門家二

代の妻・ヨシ、元治二年四月二十九日 六八歳没

・伊能彦作（伊能市郎兵衛） 伊能三郎右衛門の親族 佐原村関戸住

・柏木久兵衛 忠敬の内妻の宗家 四代当主久兵衛 天保五年一月

四日 七〇歳没 佐原村新町住 久兵衛の姪トラ

・柏木乙右衛門 初代柏木乙右衛門幸七の長男 佐原村寺宿住

戒名 逢源院薰功徳讃信士

・柏木きく 二代柏木乙右衛門の妻 荒川村（現佐原市荒川）の石井

新右衛門の娘 文政六年一〇月一日五六歳没

戒名 瓊観院耀光妙讃信女

石井新右衛門の屋敷跡の大木の根元に「延享三丙寅九月吉日」

と刻字された氏神様がある。墓地は荒川の「天妃宮」脇にある。

・柏木音右衛門 二代柏木乙右衛門の長男 弘化三年四月二十六日 五

三歳没 佐原村寺宿住 戒名 権律師寛映

・平山藤右衛門秀暁 伊能家九代長由の妻・民の父 延享元年三月七

日 五五歳没 南中村（現多古町南中）住

・平山直則（号多門） 佐原村の平山家の祖 南中村の平山季家の三

男友則の子孫 父・昌則、永沢半十郎久則の甥

・信田権右衛門将季 南中村の平山藤右衛門季孝の二男 幼名権之助

宗平 銚子の信田家に養子に入る

文政五年一〇月一四日 三九歳没

・桑原隆朝如宣（養純） 忠敬の妻・信の父 桑原家二代当主

・桑原隆朝如則（養好） 桑原如宣の子 桑原家三代当主

・桑原隆朝如弘（承庵） 養純とも 如則の子 桑原家四代当主

・工藤周庵 桑原如則の子 工藤翠卿の養子

・飯高貫兵衛尚保 常陸国潮来村（現茨城県潮来市潮来）窪谷庄兵衛

の子 幼名政四郎 飯高惣兵衛尚寛の娘・千枝の夫

天保元年一二月六日 七〇歳没

・飯高惣兵衛尚義 尚保の子 幼名吉太郎 号君露

・飯高政四郎 飯高尚義の弟

・小河原喜七 飯高惣兵衛尚寛の娘・タミの嫁ぎ先

曾我野村（現千葉市）

・上総屋甚左衛門 甚左衛門の妻・カツは、忠講の親族か 江戸上野

町に住む 甚左衛門は文化三年六月二八日没

・紙屋新兵衛 新兵衛の妻は忠誨の親族か 江戸亀嶋町住

・紙屋新兵衛の妹・タカ 新兵衛の妻の姉・チセ

新兵衛の子・新五郎、美次郎、彦次郎（忠誨より読書を学ぶ）

・紙屋庄蔵、紙屋伊助、紙屋甚七、紙屋長松

・永沢治郎右衛門俊寿 七代景寿の代より長沢を永沢と称す（旌門金

鏡類録） 本川岸住

・永沢治郎右衛門の妻イク、娘アヤ、フク、アイ

・永沢仁兵衛（仁右衛門） 上仲町住

・永沢半右衛門俊世 上仲町住

・永沢半十郎久芳 本川岸住

・永沢吉郎兵衛 浜宿住

・永沢忠右衛門（忠四郎）

・永沢藤次郎

※伊能家と親族か不明(未調査)

・伊能藤十郎 伊能源四郎 伊能恵十郎 伊能藤左衛門
 ・永沢慶吉 永沢三蔵 永沢治助 永沢万兵衛
 ・永沢善吉 永沢朋十郎 永沢半蔵 永沢幸右衛門
 ・永沢兵輔(弁次郎改名) 永沢市郎兵衛(佐原村住)
 ・者し可井のばば 橋替(現佐原市橋替)に住んでいて、伊能家で慶弔事等があると、必ずきて一泊して帰った。

年始 (文政七年一月一日、文政八年一月一〇日)

節句 (文政八年五月二五日)

稲の葬儀 (文政五年九月三日)

忠誨が佐原宅に住むようになった日 (文政九年三月一六日)

忠誨の妻・クニが長女を出産した時 (文政九年六月一二日)

年末 (文政六年十一月二九日、文政八年一〇月二五日)

二、佐原村の人

あ 油屋四郎兵衛(本橋元) 油屋庄次郎(本川岸)
 油屋定八、油屋忠兵衛、油屋三左衛門
 い 石屋三郎兵衛(上中宿) 伊勢屋平蔵(中川岸)
 石井五郎右衛門、伊藤藤蔵(中宿組頭)
 う 市之丞(荒久)、石屋太郎右衛門(婿・田山三郎兵衛)
 植田屋利兵衛(本橋元)
 え 円城寺治郎左衛門(上川岸)
 お 近江屋長四郎、近江屋幸次郎、桶屋治郎兵衛(田宿)
 大村卯兵衛、岡沢次郎

か 金田市郎右衛門、金田平左衛門(中宿) 鍵屋藤左衛門(本宿)
 鍛冶屋嘉兵衛、加成宗純、加納屋嘉兵衛(本橋元)、川口常七、
 金田平三郎、香取屋新右衛門
 き 紀ノ国屋久七、久右衛門(仁井宿名主)
 け 下駄屋清兵衛、下駄屋清蔵、吉兵衛(荒久)
 こ 糺屋善兵衛(中宿)、糺屋三之丞、郡紋左衛門(下新町)
 小林五郎兵衛(荒久)、小嶋屋清三郎、麴屋甚助
 さ 斎藤吉右衛門、斎藤官之丞、斎藤東次郎、佐野屋長作(本橋元)
 肴屋宇八、左宮屋甚兵衛、酒井伊兵衛
 し 四郎左衛門(浜宿)、甚右衛門(田宿)
 す 駿河屋忠七(飛脚)、角古(スマコ) 三五郎(宿屋)
 せ 清宮利右衛門(中宿)、清宮彦松、清宮慶兵衛、清宮新右衛門
 た 銭屋太助(本川岸)、膳具屋嘉兵衛
 て 田山勘三郎、疊屋金左衛門
 と 天満屋佐兵衛(下分)、天満屋喜兵衛、天満屋長兵衛
 天満屋惣助
 な 研屋弁蔵、研屋庄兵衛、藤左衛門(浜宿木戸場)
 藤助(仁井宿組頭)
 は 奈良屋治右衛門(新橋本)、奈良屋平吉、奈良屋善吉、
 鍋屋喜兵衛
 ひ 林七右衛門、林半右衛門、林七兵衛
 ふ 菱屋清兵衛(新橋本)、菱屋庄左衛門、広屋源蔵、平山左門
 福井利八、福井秀助
 へ 平有衛門(橋替)
 ま 升屋喜右衛門、丸屋伊右衛門(上仲町組頭)
 み 箕輪由兵衛(寺宿)、箕輪清蔵、宮沢賢蔵

も 本谷新左衛門（下新町）、本谷新三郎
や 山川伝兵衛（寺宿）、山崎藤右衛門
わ 綿屋五郎兵衛（本橋元）
よ 与左衛門（仁井宿組頭）

三、佐原村近隣の人

津宮村 久保木太郎右衛門清淵
津宮村 久保木俊藏清淵の長男
津宮村 久保木縫右衛門（津宮村名主）
津宮村 久保木佐右衛門
篠原村 久保木政吉 久保木順藏（政吉の弟）
津宮村 大川治兵衛成定（加納屋）
文化七年十一月一六日、五九歳没
・大川エイ 成定の妻 文政三年三月二一日没
・大川治兵衛成頭（加納屋） 成定の娘婿
嘉永七年七月一日、七五歳没
・大川伊津成頭の妻（成定の長女）
文化一四年四月二六日、三五歳没
・大川千世 成頭の後妻 成定の二女
安政七年二月二六日、六四歳没

磯山村 治郎兵衛 平右衛門
蓬沼村 土屋敬一 所村 平右衛門
丁子村 権右衛門（名主）
鍋木村 鍋木太郎右衛門 鍋木孝十郎
荒川村 忠右衛門 茂兵衛 伝四郎

四、江戸の人

香取村 香取平馬 新村 孫右衛門
十三枚村 椎名友輔
長嶋村 嘉兵衛 橋替村 平左衛門
安食村 仙右衛門（文政五年四月八日の条）

樽屋藤兵衛（大坂町） 豊屋金左衛門 白木屋忠藏
真岡孫兵衛（米屋） 下駄屋李斎 天満屋八右衛門
伊勢屋清兵衛（神田佐久間町） 三宅八郎右衛門 三宅勘藏
内田弥次馬（尾形町） 家主金右衛門（箔屋町）
前家主儀八（箔屋町） 地主隠居塚田 柳屋亀松（柳屋啓兵衛の子）
持畑勝助 持田勝三郎（勝助の子） 髪屋東則 石渡鐘太郎
足立長雋（医者） 安岡玄修（長雋の弟子） 青地林宗（医者）
安田龍泰 大槻玄沢 宇田川玄真 杉田立敬 大野弥三郎
飯嶋与衛門（筆工） 北双 伊三郎 英湖（画師）
豊田伊右衛門

五、上司・朋友など

○若年寄 堀田摂津守正敦 天保三年六月六日、七八歳没
○佐原村領主 津田日向守
家士 渡辺清藏（文政三年六月改名、犀輔）中安辰之進
小口泰助 栗原茂右衛門
○天文方

高橋景保 高橋小太郎（景保の子） 高橋賢次郎（景保の子）

吉田勇太郎 山路才助 洪川景佑（高橋善助） 市野金助

足立左内信頭 足立重太郎 馬場佐十郎（文政五年七月二七日没）

足立友三郎 保木敬藏 青木勝次郎

岡田東輔 吉川景武 門谷清次郎 川口勝次郎

箱田良助（左太夫、源三郎、榎本家を継ぐ） 洪川富五郎正陽

浦野五助 永井要助 下河辺政五郎 黒田東吉

今泉又兵衛 伴伝四郎 柴山時次郎 渡辺慎（啓次郎）

藤田升十郎 坂部八百次 東儀隼人

根岸 長岡 成田 朝比奈

○御儒者衆

林大学頭（九代シデユウ、十代復齋） 佐藤捨藏（一齋）

○小普請組

須藤甚右衛門 洪江新之助

あとがき

昭和六十二年四月、佐原市の伊能忠敬記念館に勤務し、膨大な量の忠敬の遺稿や測量器具に接し、忠敬の偉大さに感動して、伊能忠敬の生涯についての調査を始めました。その過程で、忠敬には未だ明らかにされていない点があることに気づき、退職後も続けてまいりました。調査内容の一部については、伊能忠敬研究会誌にも掲載させていただきましたが、もとより不勉強なものですので、掲載内容にも誤記があると思います。それらの点については、今後、皆様の研究を通じて明らかにしていただきたい。



伊能忠誨の墓石 戒名 修学院龍葉成徳居士 佐原市牧野 観福寺



伊能貞と伊能リテの墓石 観福寺
右 伊能リテ（十一代景敬の妻）
左 伊能貞（忠誨とクニの長女）

戒名 鐘智院皎月亮貞大姉
戒名 法生院心如円月童女
墓石は発生院と刻字

別海通信

師弟の絆によって織りなされるドラマに学ぶ

松浦 賢一

「伊能忠敬という人、知ってる？歩いて日本地図を作った人。その人が測量した最東端の地はどこだと思う？実はね、ここ別海なんだって！しかも最北端の地でもあるんだ。僕らはそこに住んでるんだよ！」

北海道は忠敬がおこなった十回の測量旅行の中でも記念すべき第一回目。しかもその第一回目の最終到達地点が北海道東部ニシベツ、現在の別海町本別海西別川河口付近であり、そしてこのニシベツが忠敬の測量した最東端・最北端となった。この史実を知ったのは、郷土研究会の役員会の折、吉川新一会長から伺ったときのことである。私はその感動を、私が教える高校の生徒たちに伝えたくてしかたがなかった。しかし、その史実を知る者は誰一人いなかった。おそらく彼らの親の世代でも知る人はほとんどいないのではないだろうか。しかし、少なくとも私の授業を受けている生徒たちは、忠敬の偉業を知ることができたと思う。

陽光あふれる7月17日、釧路市観光国際交流センターにて開催された「アメリカ伊能大図里帰りフロア展 in 釧路」を鑑賞。全国初の伊能大図展示公開に多くの人が興味を示し、会場はいっぱい。大図一枚の大きさが畳一畳分。214枚という壮大なるスケールに圧倒される。地図の北から南へ忠敬の側線に沿って、ゆっくりと日本一周する。その精巧さに感心せずにはられない。今回の展示は、204年前の偉業を実

感する展示となり、誰もが興奮したに違いない。同僚の物理の教員にこの展示を紹介したところ、小学生の息子さんと一緒に足を運び、感動して帰ってきたという。

その日の午後開催されたシンポジウムにも参加。渡辺一郎会長の講演を興味深く聞かせていただき、今回の大図発見のいきさつを知ることができた。

その二日前には、別海町でおこなわれた、伊能測量記念ウォーキングツアーに妻と二人で参加し、忠敬が測量した約2.9⁺の道のりを西別川河口を目指し、地元の小学生と一緒に歩いた。到達した最東端・最北端の地に記念碑が建立されることになり、その除幕式にも参列。祝賀会まで参加させていただいた。

江戸からニシベツまで四百里。歩いて日本地図を作った男、伊能忠敬の業績を偲ぶ行事に参加できたことは、大変光栄に思う。

五十代なかばから17年で全国踏破した忠敬の日本図完成への原動力は何だったか。渡辺一郎会長いわく、それは師匠から話を聞くや、すぐ第一歩を踏み出した勇氣と抜群の行動力ではないか、とのこと。師の言葉にすぐに反応し、即行動に移す。忠敬の姿は、まさに真の弟子の姿といえよう。

どんな世界であれ、ひとたび決めた師弟の道に生き抜く人の姿は美しい。また尊く、常に新鮮な向上の人生となる。師を慕い、師に近づこうと努力し続ける一念こそが、自分自身に限りない成長をもたらすものである。

忠敬の墓は、忠敬の遺言で師の高橋至時の墓の傍らに葬られている

(まつうら けんいち・

記念柱揮毫の依頼を受けて 大関 美枝子（香勝）

いざ、筆を手にしたものの書風は誰にしようか、いや書体はどのようにと迷いの中で、もうこうなったら「私の書」でやるしかない……そんな思いで書き上げました。

末筆になりましたが、

「**忠敬**さんはシベツ川を渡たのか」

到達から204年

思い引き継ぎ記念碑実現

[illegible]

遺稿

忠敬さんはニシベツ川を渡ったのか

別海町文化財保護審議会会長
吉川 新一

【釧路新聞 平成16年11月22日】

到達から204年 思い引き継ぎ記念碑実現

その除幕式まで、平成十四年七月八日付の本紙で、伊能忠敬が別海町へ到達したのがニシベツか別海のいづれが真相であつたかをテーマ

に綴ったが、どちらが正しいのかその根拠を把握しておかねばならないと悩んだ。

千葉県発刊の「伊能忠敬測量日記」によるならば、「蝦夷国の奥西別」と云所迄往来しける」とあり、伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表理事が平成十三年三月に、米国議会図書館で発見した大図には「伊能が最終的に測量したとされる赤星印は西別川の北側別海に印されている」となっている。

ちなみに西別川の河口を境に、南側をニシベツ、北側を別海と呼んでいて日記によるなら忠敬の足は南側（ニシベツ）でとまっております。米国で発見された大図によるなら北側（別海）まで印されていることになる。

そうした折りしも、加賀家文書館の戸田調査員が郷土資料館だよりNO 62で「ベツカイ」と「ニシベツ」なる一文を解説してくれており、大いに安堵もした。

即ち「自然環境を考えた場合「ニシベツ川」を中に北側の「ベツカイ」という地名も、人々が住み始めてから（縄文時代から）何度かの変遷を経てようやく「ベツかい」になったものと考えられる（伝蔵「根室地名解」『加賀家文書』による）。

また「ベツかい」の位置も「ニシベツ川」の北側と固定してはいなかったのではないか。四千年も同じ位置だというのは検証はできないが考えにくい。またこの川の南側には標高十以上のチャシコツ山と呼ぶ丘があり武四郎の「東西蝦夷山川地理取調図」にも残されており、その後、国道の直線化に伴う工事によって二つに分けられてしまったが、辛うじて緊急発掘により縄文からアイヌ時代の遺跡であることが判明したところであり、今もこの辺一帯からは土器片や石器が見つかる。この「チャシコツ山」を頂点として人々の生活の場があった可能性が

大であり「ベツカイ」の語源はこの大集落ともかわりがあったのではないか。一方「ニシベツ」という地名は、川の名前とかかわっていることは明白である―云々とある。

除幕式に記念碑はすでに固定されていなければならない。従って「チャシコツ山」にも登り、川の北側は勿論、本命の南側一本松付近も詳細に踏査検討した結果、一本松に決定したものであり今になって前記郷土資料館だよりを読む限り、「ベツカイ」と「ニシベツ」の概念は漠然としていて限られた地点、例えば狭い意味での場所・範囲をとらえた場合で呼称の使われ方に違いがあったように思えてならない。

ここに伊能忠敬がニシベツまで来て測量を終え江戸へ引き返した日から二百四年、恐らくこの日から既にこの地に記念碑を考えた人がいたに違いない。前世代の人もその様に思い引き継がれてきたに違いない。それがいま実現したのである。

（故よしかわ しんいち・別海町伊能忠敬記念碑建設期成会顧問）

吉川さんは昨年暮、ご病氣によりご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。奥様によると、記念柱建立のための準備をしていたときが一番生き生きとして楽しそうだった……とのことでした。

編集部



話題交歓

□ おかげさまで新潟の伊能大図展は盛会に終ることが出来、小生にとりまして良い勉強になりました。10月23日発生の中越地震対応で業務は専ら現地調査が中心となりました。12月10日に現地は終了いたしました。

石橋輝樹さん(新潟市)

□ 今夏は小倉より長崎まで歩き、忠敬さんも歩いたであろうと思われるところでは感慨無量でした。河島さんからはお知恵をいただき感謝しております。

岡部孝子さん(東京都足立区)

□ 元気にやっています。伊能忠敬ではないですが、ビジネスをやめ、現在は「日本中世史」の勉強に取り組んでいます。各地の城郭などを確認に行くと、その地の資料館などで忠敬の足跡にふれることもあり、印象深いものがあります。武蔵大学の展示も見学し、あらためて忠敬のすばらしさを実感しました。岡山宣孝さん(東京都杉並区)

□ 10周年おめでとうございます。「新潟フロア展」も皆様のお陰を持ちまして好評にて無事終了し感謝しています。地震、水害等の災害に励ましを頂きありがとうございます。

垣見壮一さん(新潟県小須戸町)

□ 38号の会誌に東蝦夷地の会所という記事があり、先の別海のイベントから北海道も少し見直されたかなと思います。忠敬さんの歩いたあとの地方の記録は西高東低に思われていますが、まだ見つかる機会があると思つて心待ちしています。

加藤巷児さん(埼玉県狭山市)

□ 送られてきた会報を読んでいます。内容が豊富でおいに参考になります。今までのものにも目を通したいのですがそれも出来ないと思います。したがって今までのものをジャンル別にわけ別冊としてまとめていただけたらと思います。

現在私は伊能図の測量した線を現在の地図上に重ねることをやっています。昨年法隆寺に行った際には「アメリカにあった伊能図」の中の図面を使い、測量日記と照らし合わせ、回ってきました。今年は「伊能日記」にあった島田付近の下絵図を使いCPSで歩く段取りをしています。しかし作業をやっていくうちに問題が生じることがしばしばあり専門家の教えを請いたいときが多々あります。掲示板など他の方のやり取りも見ることが出来、新しい知識も増え、知っていることがあれば答えを提供することも出来ます。是非検討をしてみてください。

加藤忠三さん(静岡市)

□ 「千葉県史」編さんのお手伝いで忙殺されております。来年3月には「千葉県史」近世資料編・下総2が刊行されますが、中心資料は佐原の清宮秀堅関係資料です。忠敬さんを育んだ佐原の文化の深さを感じております。刊行の際は御笑覧いただければ幸いです。

加藤時男さん(千葉県茂原市)

□ 幕末期水戸藩はわが国歴史に残るいくつもの事件の渦中にありましたが、水戸学と呼ばれる尊皇攘夷の精神が礎にありました。武田耕雲斎も総大将とした水戸天狗党千人余りは筑波山に挙兵後、京都に向かい西上を進めましたが、一橋慶喜公に訴えようとした行動が反幕とされ、敦賀で353人が斬首される悲劇に終りました。しかしその精神は明

治維新に引継がれました。筑波山拳兵140年の今年、歴史を埋もれさせずに140年引継し記念式を行いました。その事務局長を務めました。

川上清さん(茨城県水戸市)

□記念大会には是非出席したいと恵っていただいたのですが、定期試験で多忙でした。ギター侍の「残念！」です。でも、大図はナゴヤドームで見えました。あとは皆様にお目にかかりたかったです。近況としては「遠藤高環研究会」で忠敬に学んだ越中の石黒信由使用の磁石盤で実際に測量のマネごとをしてみました。誤差が大きかったので、残念！でした。

河崎倫代さん(石川県金沢市)

□ますます伊能忠敬にのめりこんでいます。次のようなことを要望します。伊能忠敬に関する本や雑誌で、今、手に入れられるものを研究会サイト上に出してもらえたらうれしいです。また、入手方法などわかれば。特に一般書で手に入らないような分をお願いします。

神戸利行さん(兵庫県滝野町)

□「釧路の旅」は私の大事な思い出のひとつになりました。ありがとうございました。総会、記念大会へ御参加の皆様の御健康御健闘を祈念いたします。

斉藤サダさん(函館市)

□現在、十返舎一九の死因の研究をしております。十返舎一九はご存知のように弥治喜多道中記の著者として有名ですが、同道中記は単にお伊勢参りだけではなく、各地に足をのばして総数20編にも達しています。続いて執筆した金草草軽も26編にも及ぶもので、日本各地の名所旧跡さらに習俗方言を蒐集しており、伊能忠敬とは又違った全

国踏破の経歴を持つ人です。

杉浦守邦さん(滋賀県大津市)

□ 風は北風 耳がだんだん 遠くなる

忠敬さまに 教えられてる 足の老い

武川芳男さん(宮城県古川市)

□「大鯰小鯰さぞや騒ぐらん 水涸れ果てし不忍の池」とは勝海舟の或る事件に対するざれ歌ですが、中越地震では、日本一とも云われる養殖池の水が涸れ、多くの錦鯉が犠牲になりました。地震、雷は怖いものゝ筆頭におかれる訳は明白なる現実。宇宙も良いけれど、大地の方も伊能忠敬的情熱で探求せねばなりません。七十五にして現役、おまけに大学生。会の発展を祈るのみ。

藤勝利さん(福岡市)

□「伊能忠敬研究会10周年」おめでとうございます。私の研究会とのかかわりは佐原第二回例会の時です。退職後の生き方の模索中だったと思います。いろいろな行事に参加し、テレビ、新聞記事等の伊能忠敬の人氣がありました。会員の皆様方の暖かい心や励ましに接する機会も多くあり、沢山のエネルギーをいただきました。38号の中江さんの巻頭のように「伊能忠敬研究会」は「起」から「承」ですか？退職後、初任教員の指導、学校教育の相談員をしております。少しでも今までの経験が役に立てば、「忠敬の生き方」を学び励まされる日々です。

成家淑子さん(千葉県佐原市)

□広島県神辺町のT氏から記念碑建立の朗報。長崎市や佐賀県川副町

（佐野常民出生地）などで測量日記コピーを渡して、実測200周年記念碑建立をすゝめました。東京農大では、一昨年から榎本武揚の研究会に参加。富士学会は創立満二年、全国の見立フジが伊能大図では描かれているかどうか検討課題。

西川治さん（東京都多摩市）

□書棚を整理してましたら、昭和34年に刊行された郷土史（たぶん父親から譲りうけた）が出てきました。その中に江戸時代の地元の太庄屋に関する記載があり「松田家の松田丈右衛門光遠は佐原の伊能忠敬の六女琴を妻とした」とありました。琴さんは三女と理解していましたが、本史ではなぜか六女とされておりました。いずれにしろ当地も伊能家との御縁があります。

野上哲夫さん（茨城県龍ヶ崎市）

□「アメリカ伊能大図」の九州ブロック展が先月福岡市内で開かれました。三日間でしたがマスコミで報道されたのでかなりの来場者がありました。熱心なファンも多く、国土地理院が作ったフィルム製の現代の地図を重ねながら忠敬の業績の威大さに感嘆の声をあげていました。また、下関から来たと言う60才台の男性は中国地方も見なかったと残念がっていました。狭いながらも開催できてよかったと思いました。

野田茂生さん（福岡県大野城市）

□平成17年度は、西海国立公園指定50周年と云うことで九十九島を丹念に測量した伊能忠敬の遺徳をしのいで、記念碑を建てようとの声があがっています。是非実現させたいものです。

平川定美さん（長崎県佐世保市）

□11月25日に苦小牧に初雪があり、あわてて冬タイヤに替えました。樽前山も真つ白です。八王子同心像前の噴水も冬ごもり。これから昼間もマイナスに気温が下がり、地面もカチカチになっています。電気毛布もセツトしました。忠敬らも蝦夷地測量時の帰りに金田市で雪にあっています。苦小牧は比較的雪は少ないのですが凍り付くので、車の運転は大変です。年ですし、事故のないよう今冬を過ごしたいと思っています。

テレビの新撰組に感化された訳では有りませんが、幕末のことに興味を覚え、ペリーの持ち込んだ西洋音楽（軍楽隊）と浦賀奉行所の与力中島三郎助について研究しております。今のところ、伊能図との関係はないようです。

38号では安藤由紀子氏の「高橋三平書簡」興味をもって読みました。高橋三平は勇弘・絵鞆・八王子千人同心に関する文書も残しており、苦小牧にとっても重要な歴史上の人物です。伊能忠敬と関係のあったこと初めて知りました。

「遂日寒冷に相也候得ば御自愛可被遊候」

…伊能忠敬測量日誌より

堀江敏夫さん（苦小牧市）

□老化は足からと云うことで、中山道を歩くツアーに参加しました。日本橋から京都三条大橋迄69宿を二年半かけて歩くというものです。雨の日も嵐の日も嵐の日も歩きます。忠敬さんは雨天は歩かなかつただろう等と思いついて歩いています。完歩したら祇園でパーっと一杯の楽しみで。それ迄生きていなくては。

本郷靖枝さん（千葉県佐原市）

□このたび入会いたしました。よろしく願います。小生はたいした知識も持ち合わせませんが、忠敬の終えんの地、八丁堀亀島町の近くに居りますので、関心をいだいています。亀島橋の橋詰には忠敬の業績をたたえた説明板もあり、当地ではゆかりの人物として広く知られています。しかし終えんの地には誰が設置したのか分らない、しかも場所がずれた立って看板がありますが、きちんとした碑柱の建立を望んでいます。当地では「中央区郷土史同好会」(HPあり)で忠敬を積極的に取り上げていくつもりです。講演会などにご支援をいただければ幸いです。

巻瀾彰さん(東京都中央区)

38号の新人会員紹介で巻瀾さんのお名前が晃さんになっておりました。

彰さんが正しいお名前です。お詫びして訂正いたします。

編集部

□伊能忠敬の業績への評価が高まる事を嬉しく思っています。釧路の伊能図展やシンポジウムに参加できずに残念に思っています。北海道北部に居住する者としては、間宮林蔵との接点も、もう少し詳しく知りたい処です。特に北海道北部は忠敬との直接の縁が薄く残念です。

安川義巳さん(旭川市)

□10月に埼玉県桶川市の四ヶ所の公民館のふれあい学校(60歳以上の方、半年間で12講座)で「55歳から本当に生きた伊能忠敬」と題して、2時間の座談講演を致しました。未熟でしたがそれぞれ40人、80人の皆様に喜んでいただきました。

武蔵野でのスリーデーマーチ第3日目の前日、脚のお皿を割ってから研究会に遠ざかっていましたが、健康も回復。ぼつぼつ皆様に交わらせていただきます。

矢能彰さん(さいたま市)

□平成14年の暮、伊能測量に関係する古文書が一枚見つかりました。これは10年来探していたもので、兵庫県水上市(現丹波市)内の測量で掛った費用とその金を集めた記録でした。このような古文書がもつと見つかるとうれしいのですが。

横川淳一郎さん(兵庫県丹波市)

*お便りは主に昨年暮れに頂いたものです。みなさまのお元氣をお伝えします。50円のハガキですがすごい重さを感じました。ご要望の点につきましては、早く実施できますよう努力いたします。ほんとうに有り難うございました。これからも懲りずに世情をご提供下さい。

事務局

函館駅に忠敬さんの壁画

加藤 巷児

先日、所用があつて北海道に参りました。帰途用事があり函館で途中下車しました。函館駅も改装されたと聞いていましたのでついで見物してきました。いくつかのホームをつなぐ通路の壁面が石に彫刻された函館の歴史と歴史上の人物で一面にかざられています。写真機は荷物と一緒に別送して手元にありませんでしたが、壁面に忠敬さんと象限儀がありました。

早速売店で「ウツルデス」(はじめ使いました)を買って写しましたが、ごらんの写真の始末でした。



総会報告

第一号議案 経過報告

03 年 04 年会報 38 号既報続き

2004・8・30 熱海MOA美術館展見学。

田中学芸員から説明をいただく。海保で発見の記事の影響が大きく、小学生が課題を貰って沢山来てくれた。ありがたい展示だったという。9月5日終了。入場者38、235名（目標3万人）これも海保効果だったろう。

10・2 名古屋徳川美術館展開幕。

10・29 ナゴヤドームの展示会オープニングセレモニー出席。翌日、仏のイブ・ペイレさん案内。一日一万人の入場に安心した。あと、イブさんたちは日本写真印刷へ。

11・9 武蔵大学展オープン。最高は1日千二百人入り、同大のイベントの最高を記録する。伊能家から貴重な史料が多数出品され、渡辺が講演をおこなった。当日は約560名、いままでの講演で最高の入場者数だった。NHK、朝日、読売、産経が報道した。

11・17 イブ・ペイレさんの中図は修復の御

縁から日本写真印刷に譲渡がきまり、京都で引渡しがおわった。同社では社宝文化財として完全に保存し、社会貢献したいと副社長より記者発表した。NHKが全国放送、日経全国版、朝日、読売が関西本社版で報じた。

11・19、23 新潟展 災害の後にもかかわらず、健闘した。入場料が必要なのに、四千名入場。

小林支部長（元新津市長）が実行委員長、垣見さんが事務局長として仕切っておられた。熊倉さん、山浦さんら、少ない会員が総出だった。渡辺、星埜がオープニングに出席。講演もおこなった。NHK、新潟放送、新潟日報が協力。

11・26 九州展 石川支部長が実行委員長で、会員諸君が頑張つて、3日間三千二十名。石川さんの挨拶が大変良かった。野田さんの後輩のNHKから取材をうけ、初日お昼には放映される。民放各社も取材。

12・6 日本大学展開幕。東京で初めての全国図展開。伊能家、海上保安庁、歴史民俗博物館から多数の実物を出品。初公開品も多い。東京で二つの大学が伊能再発見に参加した意

義は大きい。今後に大きな影響を与えるだろう。

前号「10年の歩み」7・14の条、地元釧路新聞は：とありますが地元北海道新聞は：にお詫びして訂正いたします。

編集部

第二号議案 会則変更

- 役員に名誉代表を設ける。
- 文言を現行実態に合わせ改める。
- 改正会則は新理事会で決定し早期に会員に周知する。

第三号議案 役員の改選

【新役員】

名誉代表 渡辺 一郎 *

代表理事 星埜 由尚 *

*就任時期後記参照

理事 伊能 洋 総務担当

理事 鈴木 純子 調査研究担当

理事 福田 弘行 事務局長 編集長

理事 斉藤 仁 総務担当

理事 香取 禧良 旅行担当

理事 柏木 隆雄 佐原支部長

理事 清水 靖夫 行事担当

幹事 石川 清一 九州支部長

幹 事 原田 照男 関西支部長
 幹 事 小林 一三 新潟支部長
 幹 事 坂本 巍 H P 担当
 幹 事 前田 幸子 H P 担当
 顧問 小島 一仁
 顧問 伊能 陽子
 顧問 安藤 由紀子
 顧問 佐久間 達夫
 顧問 大友 正道
 顧問 伊藤 栄子

記念パーティーで関係者に発表しました。
 新役員引継ぎ時期は以下のとおりです。

理事・幹事：12月12日総会終了時とします。
 新代表理事就任：05年1月以降
 大図展実行委員会解散の時期になります。

以上三議案について採決の結果、満場一致で承認されました。

大会にご参集の会員の皆様

秋葉 武敏 秋間 実 敬称略
 安藤 由紀子 石川 清一 伊藤 栄子
 井上 靖子 伊能 洋 伊能 陽子
 今村 恵二 植田 浩一 江口 俊子
 大友 正道 大沼 晃 大庭 功

懇親会にお越しいただいたご来賓の皆様

岡部 孝子 荻原 哲夫 海保 英之
 柏木 隆雄 片寄 啓 香取 禧良
 香取 秀紀 金本勝三郎 河島 悦子
 喜多 昭一 木谷 道宣 古賀 伸雄
 金 俊一郎 斎藤 仁 坂本 巍
 坂本 義親 島崎 恭一 清水 靖夫
 新沢 義博 進藤 綏子 神保 弘之
 鈴木 純子 武田 威 土肥 規男
 長岡 正利 長岡 道子 中川 幸子
 永野 達代 中山 翠 成家 淑子
 西川 治 丹羽 菊乃 原田 照男
 福田 弘行 藤岡 健夫 星 埜 由尚
 堀江 敏夫 本郷 靖枝 前田 幸子
 増田 健之助 守屋 敏子 矢能 彰
 山浦 智代 山本 公之 渡辺 一郎
 渡辺 貞子 渡部 健三 渡辺 孝雄

順不同・敬称略

国土地理院長
 海上保安庁海洋情報部長
 千葉県佐原市長
 千葉県横芝町長
 武蔵大学学長
 学習院大学元学長
 日本大学・文理学部長
 渡邊 茂樹
 八島 邦夫
 岩瀬 良三
 伊藤 斉紀
 横倉 尚
 小倉 芳彦
 島方 洗一

朝日新聞社・顧問（元社長） 中江 利忠
 千葉県横芝町前町長 実川 堅司郎
 武蔵高校元校長 大坪 秀二
 国土地理院地理情報部長 稲葉 和雄
 日本大学教授 立石 友男
 彫刻家（伊能忠敬像制作者） 酒井 道久
 伊能忠敬記念館館長 伊能 盾雄
 愛媛県立歴史文化博物館学芸員

日本土地家屋調査士会連合会副会長 安永 純子
 日本土地家屋調査士会連合会副会長 松岡 直武
 日本土地家屋調査士会連合会常任理事 待野 貞雄
 日本土地家屋調査士会連合会 斉藤 重則
 日本土地家屋調査士会連合会 小境
 日本地図センター理事長 野々村 邦夫
 日本ウオーキング協会副会長 村山 友宏
 日本ウオーキング協会専務理事

日本ウオーキング協会 木谷 道宣
 海上保安庁海洋情報部企画課 近藤 太郎
 共同通信社事業部長 瀧上 勝義
 日本地図センター常務理事 坂本 敏史
 元伊能忠敬記念館学芸員 新井 明
 日本写真印刷 関西営業部長 青木 司
 岩村 哲

朝日新聞社社会部 清水 弟
 共同通信社埼玉支局 橋田 欣典
 毎日新聞社学芸部 佐藤 由紀
 産経新聞社社会部 伊藤寿一郎
 国土地理院元部長 堀野 正勝
 日本地図センター理事 前野 政克
 日本地図センター理事 永井 信夫
 日本地図センター企画編集部長 岡田 直久
 日本地図センター 百成 了一

話題から

□「会員またはそのお友達で、和算のこと御教示願える方はいらつしやいませんか？分らない文書が10点以上あり、助けていただきたいのです。よろしくお願いします」おいでになるとよいのですが。

伊能文書の目録を作成中の安藤由紀子さん

□今年の伊能ウォーク番外編 第五回

11月14日から18日まで「世界遺産・熊野詣120*ピックウォーク」として田辺から新宮までが予定されています。JWA主催。



□伊能研究会の発足時からお世話になっており、今の事務所の大家さんでもある地図センターの野々村さんが新刊です。

目次から 第7章は伊能忠敬に酔うとあり、サブタイトルに「伊能大図を覗き込む」「伊能測量最北の地に立つ」「客足予測大はずれ」「伊能ウォーク、真面目にいい加減に」など。伊能ウォークではサポータークラブで支援を。

ご存知のように毎週「アサヒコム」で「インターネットキャスター」の快筆を振られています。旅とお弁当にお酒から現代の地図を野々村流に編集しています。デジタル技術の地図づくり世界とご自身の豊かなアナログ感性はただの地図学ではない、深い味わいがあります。スローな地理な旅がお勧め。是非一読を。

実業之日本社 04年12月 ¥1400



□芳賀さんの会社「之潮（コレジオ）」制作「戦後60年を迎えるいま暫くにして、後世に伝えるたしかな記憶遺産としてご披露できることを喜び合いたい」 編者 井口悦男

042132811503



□月刊「地理」11月号 古今書院

特集 伊能図の魅力 日大の島方さんはじめ清水、鈴木、星埜、渡辺の各氏が魅力を紹介

忠敬談話室だより

推歩先生と銀座の忠敬先生 山本 公之

推歩先生といわれたと紹介されたのまではいいのだが、推歩の意味が間違いないことが解る。ちよつと古くなるが2000年11月発行の『週刊ビジュアル日本の歴史』（発行所デアゴスティーニ）江戸の行革⑩揺らぐ鎖国体制。その中の劇画の部分『・八六二・八六三・八六四・八六五、いいかー〇〇〇まで交替じゃ！歩数測量とはまた難儀なものですな！ぐちをこぼすな・これが一番せいにかくなのじゃ！幕府は西暦一八〇〇年（寛政一二）年、忠敬に蝦夷全島の地図作りを命じた。一行は一日に40〜44キロを踏破した。なるほど高橋大先生が先生のことを「推歩先生」と渾名をつけられた理由がこれでわかりましたよ』

歩数を数えて歩いている会話のすべてだが、この劇画の最期が忠敬が星空に向かって天測している姿が描かれている。

銀座で忠敬先生にお会いできる幸せが叶うのです。

ぜひお出かけの節はご覧ください。「もう知っているよ」いうお方もあろうかと思いますが、地下鉄それも銀座駅。いまは東京メトロとなつていますが、A13の出入口から地上へMGこと銀座松屋の前へ。目立たないが、道路際に地味な時計塔と花壇がある。

「中央通りを美しく彩る花はボランテアの方々によって維持されています」で始まる高さ50センチほどの見易い位置に看板がある。よく注意してみるとこのプレートに何と眼を疑った『変革の新しい力』と題され、伊能忠敬と「大日本沿海輿地全図」と書かれている。

日本を開国に導いた近代日本地図

江戸後期に日本全図を踏破測量し、きわめて正確な日本地図を作ったことで知られる伊能忠敬は、晩年八丁堀亀島町の屋敷に住み、そこで最期を迎えました。一八〇〇年（寛政一二）から十七年間かけて製作された「大日本沿海輿地全図」は一八二八年（文政一一）にシーボルトによって写しが国外へと持ち出され、これをもとにペリーは日本開国の計画を練ったといひます。開国にあたって忠敬の地図が果たした役割は決して小さくはありませんでした。と紹介されている。

測量隊の測量風景 「浦島測量之図」
宮尾幾夫氏寄託 呉市入船山記念館所蔵

左下に小さく伊能忠敬画像（伊能忠敬記念館蔵）

近くには桜田門外の変も紹介されているところからみて、どうも日本激動の時代を乗り切った特に開国にまつわる偉業として取り上げられたのではなからうか。

そういえば、大谷亮吉編著『伊能忠敬』一九四頁なかば以降に「斯の如く幕末に當り忠敬の実測圖は殆ど避くべからざる状態にありたる外國との葛藤を能く未然に防止し國威を損傷せざりしのみならず」と佐野常民が地學協會にて演述せる實歴談による」とある。

日々の話題から

□ 蘆田（あした）文庫目録・古地図編の寄贈 11・16

明治大学人文科学研究所・蘆田文庫編集委員会では明治大学図書館が所蔵する歴史地理学者蘆田伊人（あしたこれと）旧蔵古地図コレクションについて調査研究を行なってきたが、このたび「文庫目録・古地図編」が完成し寄贈されました。会員の柏木さんご尽力。

□平成地図御用所が再開。海保四図が原本大に拡大され、彩色作業に入っていたが、暮れに完成し幕張展で初公開されました。発見当時の地図が見違えるような立派な地図に生まれ変わりました。これで大図214枚がすべて繋がり、海岸線の青さが見事でした。

□忠敬の足跡を訪ね、別海の記念碑へ
中標津の神代さんから丹羽菊乃さんへのお便りから、「釧路地方の地名を考える会」は例会で別海を訪れた。同行した村崎恭子先生は伊能図に記されたアイヌ語地名の解説をされた。先生の著書「カラフトアイヌ語」については司馬遼太郎が『街道をゆく、オホーツク街道』『アイヌ語という川』で紹介している。新聞写真は記念柱前で。



村崎恭子先生のこと

村崎恭子先生は、伊能忠敬の足跡を訪ね、別海の記念碑へ中標津の神代さんから丹羽菊乃さんへのお便りから、「釧路地方の地名を考える会」は例会で別海を訪れた。同行した村崎恭子先生は伊能図に記されたアイヌ語地名の解説をされた。先生の著書「カラフトアイヌ語」については司馬遼太郎が『街道をゆく、オホーツク街道』『アイヌ語という川』で紹介している。新聞写真は記念柱前で。



風に乗せて

村崎恭子先生は、伊能忠敬の足跡を訪ね、別海の記念碑へ中標津の神代さんから丹羽菊乃さんへのお便りから、「釧路地方の地名を考える会」は例会で別海を訪れた。同行した村崎恭子先生は伊能図に記されたアイヌ語地名の解説をされた。先生の著書「カラフトアイヌ語」については司馬遼太郎が『街道をゆく、オホーツク街道』『アイヌ語という川』で紹介している。新聞写真は記念柱前で。

北海道新聞 16年11月15日

□忠敬さんの本が青少年読書感想文コンクールで活躍
03年34号で紹介した『岡崎ひでたか・作 高田勲・画 天と地を測った男・伊能忠敬』が今年も取り上げられている。神奈川県の小

学六年生、石上一翔くんが表彰された。『緯度一度分の長さは111km』この事実を僕はすでに知っていた。この本を読んで改めて気付いた。一人の人間が生涯をかけて貫いた夢への情熱と努力があったのだ。僕は忠敬と同じで算数が好きだ。この力を生かして将来人の役に立てる仕事ができたらいいと思う。…僕は忠敬のように何歳になっても夢を諦めない力を持っていたい。そして歴史を作る一步を踏み出せたら最高だ』とたいへん立派な感想文を書いている。

昨年は愛知県の中学一年生、山本直人君がやはりこの本で受賞している。『隠居になってから畑ちがいの世界に飛びこみ、若者と勉学に励んだ。少年時代からの夢とはいえ、当時の平均寿命から考えると「守り」や「あきらめ」に入る時期なのに勇猛果敢に挑戦していった。物事を始めるに遅すぎる事はないと強く思った。…』とこれもすごい感想だ。若いみなさんによく読まれているのはうれしいニュースです。
□資料紹介『伊能測量隊員柴山傳左衛門旅中日記』記念大会で講演をいたたぎました安永純子さんの著作です。愛媛県立歴史文化博物館「研究紀要」の六号（旅中日記上）七号（旅中日記下）九号（伊予の伊能測量）三冊で¥2550送料込み。TEL 0894-6216222
□前号でお願いのボランティア募集。発送に中川、安藤さん、催事受付に伊藤、進藤、守屋さんほか。会報では坂本、前田さんに感謝。

お知らせ

□「会報合本・31号〜38号」頒布いたします。五千円（送料込み）申し込みは事務局へはがき、FAX、留守電、福田自宅へ。
□忠敬生誕二百六十年記念祭が佐原で。6月11〜12日に予定。研究会旅行と兼ねて一泊の予定あり。詳細は次号でお知らせします。
□例会の予定「成田山仏教図書館の伊能図」別途ご案内いたします。

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。
二、つぎのような活動をおこなっております。

①会報の発行

発表誌 原則として年四回 64頁

ー予定ー

第40号締切3月末 発行5月

②例会・見学会の開催

第41号締切6月末 発行8月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第42号締切9月末 発行11月

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号を明記し、通信欄には専門、趣味、入会の動機など御意見を書き添えて、入会金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

④（04年8月に事務所は新宿区下宮比町から移転いたしました）

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2F 伊能忠敬研究会

Tel・Fax

03-3466-9752

事務局メール

fuku-inh@gis-so-net.ne.jp

郵便振替口座

001501610728610

投稿規定

会員の皆様から会報の原稿を募集しております。一回の掲載は、原則として2〜8頁です。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任。手書き、パソコンなど形式自由です。一頁は二段組31字×26行（400字詰用紙4枚分）、三段組20字×30行です。文字は9ポイントを使用しています。タイトルは5行分、写真、図表等（返却します）添付可。

伊能忠敬研究会のホームページ

ホームページでは大友さんに永年お世話になりました。今後は新入会員の秋葉武晃さんに引き継がれます。どうぞよろしく。

<http://www2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記

暮の記念大会では皆様の忠敬パワーを有難く頂戴しました。連続の記念号でまた8頁増になりました。ご支援ご協力に厚く御礼◇私のパソコンが突然動かなくなり、急遽入院。手術を受けましたらすべてのデータが消失。このため本号の入力はやり直しに。難儀やな。半月以上発行が遅れました。お詫びいたします◇渡辺さんから星基さんへ。役名は変わりましたが踏み出す一歩は続いています◇「一歩跨（またぎ）」が岩城さんの写真に写っていました。一歩で飛び越えられる川幅が国境！◇今号小島さん山本さんの原稿に難儀の表現あり◇一月神戸で国連防災世界会議があり小泉さんが出席されました。会議開催の記念切手は「難儀鳥」◇江戸時代の鯉絵は安政江戸地震の直後から世に登場した錦絵版画。被害にあった職業の人々の道具で構成された「なんぎちよう」と呼ばれる架空の鳥が地震の元凶とされたナマズを捕まえているデザイン。そうか難儀鳥は益鳥か。世界にはばたけば災害の減少は間違いない◇難儀の寒い冬から季節が移ります。難儀鳥が飛翔（F）

THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.39 2005



Edited and Published
by
THE INOH TADATAKA SOCIETY